
俺よ、死んでも心をしっかりもて・・・ムリぽいけど

斬滅のザン＆食べられる野草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺よ、死んでも心をしつかりもて・・・ムリっぽいけど

【Zコード】

Z9296M

【作者名】

斬滅のザン&食べられる野草

【あらすじ】

ひよんな事で死んでしまった高校生、伊達^{だて}晴^{はる}は死後の世界で神様（変？）のせいで死んだ事を知りなんやかんや頑張る物語です。

初作品なので過度な期待して見て、「なんだよこれ、めっちゃつまんねーじゃん、作者死ねよ」とか「つまんな過ぎて、今にも死ねるわ」とかその他諸々の事情とか俺の許容範囲超えるんで見ないでください。

第1話死んで償え…………あ…………いや…………ごめん…………死なな

初書き＝バカなのか俺？

第1話死んで償え…………あ…………いや…………「あん…………死なな

伊達 晴（以降、晴）「…………」

知らん天井だなー何処だろ？

田覚めるとなんかよくある？感じじで由に空間に居た俺、こと伊達まさ・・・・・じほん、晴。

辺り一面真っ白で何だか……「ここは、神の間と言つて……うんぬんかんぬン・・・君は死んだんだよ」とか言われるよつな場所に見える。

晴「さて、神（笑）を探してみるか」

起き上ると意外にしつかりした足場だった……晴は経験値が上がった。【大地を踏みしめる】を覚えた。

晴「ん？なんか置いてある」

ふと足元を見ると紙切れがあつた。さつそく開いてみると、

『拝啓 伊達 晴様へ

私は神です。晴様に話がある………… グシャ』

晴「芋虫でも食つて発狂死してろ……」の肩が

なぜかむかついたので握り潰した。

? 「ちょ、酷くない?」

急に後ろから声が聞こえ、振り返るとそこには見事麗しい・・・・変態が居た。

”顔面”を殴り飛ばすと良い音が響いた。

? 「ぐらう！」

晴「死ねえええええええ！」
ゴスツ

なんとなく追加のどどめで本気の蹴りを“顔面”に入れる。

? - わがん

晴一キモい――――――！」
ガスツ

本当に最後のとどめのパンチを“顔面”に叩き込む。

「」と「」も「」

四庫全書

二発目から反応がキモいぐらい、いやキモい。

? 2 「ちよつとあ・な・た?」

化け物が凄い勢いで妻?の下へ行く。

? 2 「これだからあなたは、分かつていいんですか全く・・・・」

化け物が綺麗な女性に怒られるシユールな絵が見れた。

30分後

? 2 「ホントうちの主人が失礼な事を」

説教を終え深々と俺に頭を下げて謝る女性。

晴「いや、こっちも被害無いですからお気になさらず」

? 2 「そうですか、ならいいんですけど」

なんでこんな化け物と結婚したんだろこの人?

晴「はい大丈夫です。それとかぬ事を伺うんですけど、ここは何処なんですか?」

? 2 「ええつとこには・・・」

なぜかどもりだし先程の化け物を見やる女性。

? 「それについては俺が話そつ

「」

そう言つて眞面目な顔になる化け物。

? 「俺は神なんだ、そして俺の妻の女神だ」

ペコリと女神さんが頭を下げる。

神「そして簡単に言つなら君はすでに死んだんだよ」

晴「へえー、そつなんですか」

神「案外返事が軽いな」

だつてこれが俺だもん。

晴「そつかな？ ¥ ¥」

神・女神「「褒めてない、褒めてない」」

晴「ええ———」

むくれる俺。

晴「まあ、死んだんですね俺」

神「ああ、わしのミスで」

にこやかな笑みでそつ告げる。

晴「死んで詫びろ——！」「ゴスツ

右のフックが左の頬を捉えて転がる神（肩）。

神「ゴハツ——！」

神（屑）に駆け寄り追加コンボの蹴りが”顔面“に入る。

ガスツ

神「グッハー！！」

そして”顔面”を踏みつけながら、

晴「あああん、舐めてんのかコラアア、テメーのミスで俺死んでんだよ。何笑つてんの？」グリグリ

神「い、痛いれふ」

「アアン」
晴一 知るかカスガ!!
命と痛みどつちが重いか知つてんのか!!?

今だに踏みつけたままキレる。

神「命でふ」

晴「知つてんなら、言つこと有るよな？」

神「すみま・・・」

晴「は？舐めてんの？それだけ？重いんだろ命は？」

神「ふえふえも、なにをふれば？」

晴「生き返らせるとか出来んだろう？神ならじゅってみる。いや・・・」

” もれ ”

神「はー、やらいでいただきま

そして俺は転生した。

第1話死んで償え…………あ…………いや…………「めん…………死なな

作者「なんか微妙だな」

晴「微妙つーか、もう無理?」

作者「なにー、まだまだ行くぜ」ガクガク

晴「もうお前のHPはゼロだ教会に行け」

作者「まだ追われねねー」

晴「字、間違つてんじゃねーかー!」

これからもできれば読んでください。
ではノシ

第2話 ヤツホー俺一度田の誕生ーー（前書き）

どうなるんだろう？

まあ、頑張るぜーー！

第2話 ヤツホー俺一度田の誕生!!

あの悪夢のような空間から・・・・出れて無い!!

晴「で?俺の転生許可は承認されたの?」

なんか神(屑)の仕事部屋に踏ん反り返って居る俺が居た。

神「えつえとですね?参考に何処に行きたいんですか?」

神が俺に質問する。

晴「別に何処でも良いけど、恋姫とかマジコイとか・・かくかくしかじか・・・とかかな」

神「結構あるね?」

だつて健全なる一男子なんだからフツーだろ・・・

晴「でも?その健全な男子の人生潰したのはだ・れ・か・な」「ギリギリ

神「ぎやあああああ、痛い痛いよー、アイアンクロー死ぬ――!」

思いつきり顔面を潰れる一步手前まで握る

晴「大丈夫、大丈夫、お前か・み”だから”さ」

1時間後

あれから少し落ち着き。

晴「で?OKなの」

神に少々苛立ちつつ質問。

神「うん、何とかOK」

そんなにギリギリみたいな言い方すんなや

晴「そんで、俺何処行くの?」

神「それはランダムにしたから僕にも分かんないんだよ」

そんなキモい顔して優しい男、装うなや・・・ムカつく

晴「じゃあ、わざと送れよ。ここに居るとお前を殺したくなる」「

神「あ、じゃあ何か願い事無い?できる範囲で叶えるよ?」

神は破格の条件を突き付けた・・・突き付けて無いけど・・・

晴「ん？ そうだな～、ん～」

突然のことを考え出す。

晴「じゃあ、身体能力最強にしてくれよ。あと見たら完璧に真似するとかどうだ？」

神「OK、分かつたよ」

神、当然の「とく」を承する（軽くビックリ）

晴「じゃあさつさと送れ」

神「じゃあ、送るね。次の人生は良い人生だと願うよ。バイバイ」

第2話 ヤツホー俺一度目の誕生!!(後書き)

作者「俺の精一杯だぜ」

晴「ホント使えねーよなお前」

作者「貴様!、斬滅してやる、首筋を差し出せ」

晴「戦国BASARAに感化されんな、ボオケ」「ゴスツ

作者「ぐはっ、だ・・だが・・・負け・・・ん・・・・ぞ・・・・」

晴「次回も生温かい目で見てくれよな」

第3話 なんかいきなり飛ぶゼ（前書き）

いきなり原作を変えて申し訳ございません

でもなんかいきなりハードルが高い事に気づいてしまった

ホントに申し訳ございません

第3話 なんかいきなり飛ぶぜ

なぜかすげー飛ばされ16年ぶり?伊達 晴改め、東雲 晴でーす

あの神の間から早16年が経ち今の所普通に暮らす俺。

でもしつかりちゃんと転生した事がわかつた・・・なんてつたつて・・・・・

晴「孝~、暇じゃね~これ?」

そつなんと『学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD』の世界に来てしまった。

イヤー最初はさ、まさか違うよなー、とか思ったのが間違いだつた。

もろ藤見学園の制服を見ちゃつたんだもん。その後の止めが、我らがアイドルの宮本麗が同じ幼稚園で真っ先にお友達になつたゼ・・・・だつて将来あんな美人でカワイイだゼ、その頃にお近づきになりたいじやん!!

そして俺の隣で黄昏氣味の少年、小室 孝は、俺の友達で唯一無二の親友だ。

なぜか原作とは違く、女の子に口クつて振られて落ち込んで居る・・・らしい?

孝「だいたい、何で晴も授業に出てないんだよ?」

晴「俺は頭が良いからな

決め顔で「フツ」と言つ俺。

孝「この前のテスト、オール赤点ギリギリだったじゃねーかよ

晴「グフツ、あ、あれは・・・そう、寝不足で調子が・・・」

孝「夜の9時にいつも寝るのに寝不足はないだろ」

「こいつ痛い所ばっか言葉の槍で突いて来やがって。

晴「・・・くそつー、良いじやんか友達が心配なんだよ

くそー、ハズ過ぎる//

孝「・・・ハハハ、よくそんなん事言えるよな・・でも嬉しいよ

そいつ言つてまた外に目をむける孝と俺。

すると数人の教師が校門に向かうのが目にに入る。孝も同じ様子だ。

孝「なんだ?あれ」

孝の目線の先を見ると、校門に体当たりする人影が見えた。

晴「(まさか、始まるのか?)なんかやばそうだぜ?」

その光景を眺め、いつの間にか寄りかかる体勢をやめ食い入る様に様子をうかがう。すると人影が手島教師の腕に噛みつくのが見え、少し騒いだ後、事切れた様に動きが止まつた。そして教師が手島に

近づく。

晴「おーおー、いつやあヤバいぜ」

孝「ああ、アレは死んでるみたいだな」

すみと手島が起きると他の教師に食いつき始めた。

晴「おい孝、この事、永や麗に伝えて逃げるぞ」

孝「わかった」

そしてつよい絶望の幕が上がる。

第3話 なんかいきなり飛ぶぜ（後書き）

作者「なんか短いか？」

晴「短いんだよ、バカ」

作者「でもこれがおれの限界」

晴「マジでクオリティー低いな」

作者「だから限界だつて」

晴「こんなの見る奴居るのか？」

第4話 始まった地獄・・・弾ける青春！（前書き）

タイトルは関係無いと・・・思う？

第4話 始まった地獄・・・弾ける青春!!

あれから孝と別れて俺は学校の剣道場に居た。

晴「えーっと、木刀、木刀つと

剣道部の男子更衣室に入り木刀を探す。なぜ木刀かは、聞くな。

すると奥に木刀が何本か立てかけてあった。

晴「これで良いかな？」

その中でも特に堅そうな物を手に取り一振りする。

晴「うん、大丈夫そうだ！」

そう言つて剣道場を出る。

そして校内放送の音がなり、混乱が始まり生徒が逃げ出す。

晴「はあー、不幸だぜー」

俺の目の前に物理の木庭教師がゆっくりと近付いて来る。

晴「くそー、こばちゃんの授業好きだったのねういー！」

木庭の頭を木刀で叩き割る。

晴「くそー、なんで現場に血が流れるんだー・・・まといいや

踊る大〇査線ぼく言つてみるが・・・秋田、じやなくて飽きた。

その足で技術室に向かう。

晴「俺、参上ー」

と教室にゅつくり入る。何、言葉と出方が合わない? 僕は慎重な
のー!

晴「何も誰も居ないか

原作通りにここに高城たかぎ 沙耶さやと平野ひの ロータが来ると思つので待機
する事にする。そこで和みの為に途中で買つて来たウーロン茶を飲
む。

晴「はあー、マジウマだぜー」

そんな感じで和んで居るとドアが開く。

沙耶「つーーなにしてんのよ、晴ー」

ロータ「えー東雲?」

晴「ん?沙耶にロータか、無事で何よつだぜ

2人ともなぜか驚く。

晴「狭い所ですがどうぞ」

沙耶「なにふざけてんのよ！」

晴「そんなに怒るなよ、軽いジョークだつて」

沙耶「今の状況分かつてんの？」

晴「知ってるよ、何かゾンビみたいのが居るんだろう？」

沙耶「知ってるなら、少しばかり慌てなさいよ！」

晴「慌てて事態が解決すんのかよ？ そつじやねーだろ、だから少しは落ち着け」

沙耶「うつー。わかったわよ」

コーダ「東雲、凄いね高城さんに尻込みしないなんて」

晴「まあ、幼馴染だからな」

そう俺は転生して沙耶の幼馴染みになつたのだ！！

沙耶「関係無いわよ！」

その後、沙耶がコーダに原作通りガス式の釘打ち機を見せて武器を持たせると外に 奴ら が集まり始めた。

沙耶「ちょ、来てるじゃない、早く何とかしなさいよ。」

晴「ありやー今はムリだろ、俺がカバーするからそこににある物全部鞄に詰めろ」

沙耶「なに、私に命令するの？」

晴「なんだよ？ここで一緒にじて臨終するか？」

沙耶「分かったわよ！」

そう言つて俺は木刀を 奴ら に構える。沙耶は鞄に物を詰め込み始める、「コータは鋸(のこぎり)で何か作業している。

晴「おらつー邪魔だ！」

木刀で3人の頭を割ると後ろで パスッ と音がして 奴ら が倒れる。

晴「なかなかの腕じゃねーかコータ」

「コータ」「この位簡単だよ」

そのまま俺達は教室を後にすると沙耶の「? 奴ら の生態実験」をした後職員室のドアの前で 奴ら との戦闘になった。

晴「コータ、援護頼むぞ」

木刀を下段に構え走り出す。まずは右の 奴ら の頭を割つて行く。

「一夕「了解！」

「一タの威勢の良い返事と共に釘を奴らに打ち込む。

晴「コータ、弾はどの位だ!?」

「あと少しで黒くなる！」

沙耶は早く詰め替えなさいよ！」

二〇 外で居ますよ……後ろは

そしにて街を打つる

清江先生集

卷之三

俺は沙耶に向かって走り出す。すると目の前に、妙らの「四か現」

晴一邪魔たああああああああああ！！！」

木刀でこめかみに一撃を叩き込み吹き飛はす。

シ耳 - は晴

コータマガジンか!?」

そして下に落ちた鞄を踏み沙耶が転ぶ。

沙耶「ツ！ハツ！・・・寄らないで、寄らないで…」

コータ「高城さん…！」

すると沙耶は近くのトロフィーを投げつけるが 奴ら は怯まず進む。

沙耶「来るな、来るなああ

そして奴らが噛みつこうと掴む瞬間その間に俺が割り込む。

晴「つ！…沙耶はやらせねーぞ、この俺がな…！」

そして 奴ら は俺の腕に噛みつく。

晴「ぐあ…！」

沙耶「晴…！」

コータ「東雲…！」

すると視界に麗と孝と鞠川校医、毒島先輩が田に入る。

麗「つ！…晴…！」

孝「晴うう…！」

そして孝達2人と毒島先輩の目が合い。

毒島「右は任せろ！」

孝「麗！」

麗「左を抑えるわ！」

3人は走り出す。毒島先輩が左2人を瞬殺、麗が右の1人をモップで貫く、最後に孝が正面の1人と俺の腕に食らいつく1人を殺す。

麗「晴！！」

沙耶「晴！！」

2人が同時に俺に寄る。

麗「いやっ！ 晴は、晴まで 奴ら にならないで・・・これ以上私を置いて・・・行かないで・・・」

沙耶「晴！ いやよ、こんな私を庇つて死ぬなんて許さないんだから！！！」

麗は泣き始め、沙耶は目に涙を溜め罵倒を浴びせる。

孝「おい、晴、まだ僕は落ち込んでるんだ。僕の傍でまた心配してくれよ！！！」

3人共、ギャーギャーと言いたい事を言つ。

晴「・・・ハハハ、大丈夫だつて、ほら

そう言って制服の袖を捲くると籠手の様な物を見せる。

晴「大丈夫、奴らの歯は届いて無いから」

そう言って3人に微笑みかける。

第4話 始まった地獄・・・弾ける青春！（後書き）

作者「なんか・・・酷い妄想だな今回？」

晴「まあ、お前の頭はいつもこんな感じだろ？」

作者「失礼な事、言つた、ちゃんと他も考えるよ」

晴「どうだか？」

作者「なにー、俺の頭の中覗くか、コノ野郎ー！」

晴「ビタまかち割るぞ」

作者「やつてみ・・・つぐへ」

第5話 あばよといつあへん・・・なんか違う?（前書き）

いやー、人に見て貰えて評価貰つと嬉しいですね～

これからも『愛読のほどよろしくお願いします

第5話 あばよとつあ～ん・・・なんか違う?

あの後直ぐに俺達は職員室に立てこもった。

晴「つ！…痛い、痛いつすー」

悶える俺、抑える孝、テキパキ・・・いや、偶に止まるが手当に勤しむ悪魔・・・もと言い鞠川校医、クスクス笑う毒島先輩と苦笑いのコータ、この状況で説教を始める沙耶と麗。

沙耶・麗「「聞いてるのー！」」

晴「はいいいいい！」

何だ・・・」のカオス。まあそんな事があつてこれからについてみんなで会議。ちなみに移動は原作通り遠征用のマイクロバスだ。

孝「僕達2人は家族の無事を確かめま。、近い順にみんなの家を回るとかして、必要なら家族も助けて、その後は安全な場所をさがして」

そこまで聞くと俺はテレビに目線を向けると麗もテレビを見ていた。

沙耶「どうしたの？」

みんなもテレビに目を向ける。そこではニュースで 奴ら の出現を暴動と称して放送していた。そこには俺達と変わらない地獄が映っていた。その映像も途切れスタジオに映像が戻る。その後はアナウンサーが自宅から出ないように促した。

孝「それだけかよ、どうしてそれだけなんだよーー。」

孝が机を殴りつける。

沙耶「パ一ツクを恐れてるのよ」

麗人
一

沙耶「今だからこそよ。恐怖は混乱を生みだし、混乱は秩序の崩壊をもたらすわ・・そして、秩序が崩壊したら、どうやって動く死体に立ち向かうと言つの？」

麗「信じられない、たった数時間で世界中がこんなに為るなんて」

麗は後ずさりして俺の制服の裾を揃む。

お母さん、俺は幸せでーす b y 晴・・・なんじゃこの威力、裾
摘まれただけでＨＰがゼロまで持つて行かれただとーーーーーーーー
・・・ゴホンッ、失礼取り乱しました。

麗「絶対安全な場所、あるわよね?」きっと直ぐいつも通りに・・・

L

沙耶「なるわけ無いし」

沙耶が麗の言葉を遮る。

孝「そんな言ふ事無いだろ」

沙耶「パンデミックなのよ。しょうがないでしょ」

鞠川「パンデミック！？」

沙耶 感染爆発のことよ、世界中で同じ病気が大流行してゐて事」

孝「インフルエンザみたいな物か？」

孝が思いつく例を出す。

沙耶「1918年のスペイン風邪はまさしくそう、感染者が6億以上、死者は5千万になつたんだから。最近だと新型インフルエンザで大騒ぎになつたでしょ」

鞠川「どちらかと言うと、14世紀の黒死病に近いかも」

沙耶「その時は、ヨーロッパの3分の1が死んだわ」

・・・全くらからんぞ、何語だ？

「どうやって病気の流行はおさまったんだよ？」

鞠川「いろいろ考えられるけど、人間が死に過ぎると大抵は終わり

よ。感染すべき人が居なくなるから」

「一タ「でも、死んだ奴はみんな動いて襲つて来るよ」

毒島「拡大が止まる理由が無いと言つた事か」

鞠川先生が思いついた様に言つ。

鞠川「あ、これから暑くなるし、肉が腐つて骨だけになれば動けなくなるかも」

毒島「どれくらいでそつなるのだ?」

鞠川「夏なら20日程度で一部は白骨化するわ。冬だと何ヶ月も掛かるけど・・・ともかくそう遠くない内に・・・」

沙耶「腐るかどうか分かったもんじゃないわよ」

晴「何で?」

なんとなく頭を丸くする感じで首を傾げる。

沙耶「うつー／＼／＼＼、うつ、動きまわって人を襲う死体なんて医学の対象じゃないわ。下手すると何時までも」

毒島「家族の無事を確認した後どこに逃げ込むかが重要なだな。兎に角、好き勝手に動いていては生き残れまい・・・チームだ、チームを組むのだ」

晴「了解すつ」

毒島「出来る限り、生き残りも拾つて行け」

孝「はー」

晴「よつしゃ、行くぜー。」

まずは、職員室を出ると 奴ら が居た。ロータの援護で手前の2人を倒す。近寄ってきた奴を孝が吹き飛ばし脱出が始まる。

毒島「確認するべ、ムツに戦う必要はない。避けられる時は絶対に避ける」

沙耶「連中は音にだけ敏感よ。それから普通のドア位なら破る位の腕力があるから、掘まれたら食われるわ、気を付けて」

そこまで言つと口笛声が耳に届く。

晴「聞いたで」やる、我らの助けを呼ぶ声がー

みんな「　　・・・・・」

晴「なんだよ、行かないのか?」

沙耶「ふざけないでよ」

晴「いや、決してふざけた訳では、つて、早く助けないと」

そのあと階段にいた4～5人の生徒を救出、噛まれた人も居らず俺達と一緒に行動する事が決定した。そして、原作でも難関の正面玄関に到着した。

毒島「しかし困った。」そのまま校舎の中を進み続けても襲われた時身動きが取れない」

麗「玄関を突き抜けるしかないのね」

毒島「高城ぐんの説を誰かが確かめるしかあるまい」

みんな「…………」「…………」「…………」「…………」「…………」

みんなが俯く。

晴「んじゃ、俺が行くよ」

俺は階段から重い腰を上げると階段から見える外を見た。

孝「なつ！ 晴より僕が行く」

麗「晴が行くより私が」

毒島「私が先に出た方が良いな」

やつぱり原作通りみんなに止められる。

晴「いや、俺が行きますよ。先輩も麗も女の子なんだ、そんな役目

は負わせられない

2人の顔が少し赤くなる。

晴「孝も、お前はもしもの為に居てくれ

孝の肩に手を置く。

晴「それに、俺は沙耶を信じてるからな

沙耶「なつ／＼／＼／＼」

ニカツとみんなに笑いかける。

そして玄関に向かつて音を立てずに向かう。田の前を 奴ら が横切るが反応が無い。

やつぱ、原作見たいに見えて無いらしい。だから足元の靴を取り遠くに投げる。すると意外に大きな音が鳴り 奴ら が一斉に向かつ。そのまま玄関のドアを開けてみんなを誘導する。そして、ここで俺は思い出す。最後の生徒が音を鳴らして走るはめ・・・ゲフン、襲われる事になる。でも時すでに遅し、音が鳴ってしまった。

孝「走れ！」

孝の声にみんなが走り出す。

沙耶「何で声出したのよ。黙つていれば手近な奴だけ倒して、やり過ごせたかもしないのに！」

その後ろに 奴ら が迫るのを吹き飛ばす。

晴「はーはーい、いかがつかなー、あんまし声出すなよ、相手さん
が襲つて来るぞ?」

沙耶「いやちつこで無いわよーーー！」

晴「うおひ、やおすか?」

麗「あんなに音が響くんだもん、ムツよ」

コータ「ひー・・・・どんどん増えて来るー！」

孝「話すより・・・走れー、走るんだー！」

孝を先頭に置いて走り出す。その後をみんなが追いかける。

そんな中俺は後方で 奴ら を食い止める殿をしていた。しぃがり粗方^{ヒラ}づけて前を見るとタオルを首に掛けた生徒を見つける。

晴「おらひ、ホントに邪魔だな。わつと休みたいぜ」

生徒「あ、ありがと、ハハ同感だね」

晴「わつとこんな所出る為にバスまで行くぞ。そうだタオル外し
とけ、それ掴まれたらENDだぜ」

生徒「え、ありがと」

彼は首のタオルを投げ捨てる。

晴「そろそろ行くぜ、俺が援護するからバスまで走れ」

生徒「う、うん、でも君は？」

晴「大丈夫だ。そんな事より自分が生き残る事を考えろ。 . . .
今だ、行け」

彼は走り出すのを見送ると木刀を構えて 奴ら を倒して行く . . .
・・粗方片付けると俺もバスへと走り出す。バスの近くに着くと孝
と毒島先輩が居た。

晴「おらつ、孝、みんな乗ったか？」

孝「ああ、後は僕達だけだ！」

晴「2人共さつあと乗れ」

そう言つて俺達はバスに乗り込む。何か先生がわたわたしている、
そして孝がドアを閉めようとすると助けを求める声がする。そこを見
ると3年A組の紫藤と生徒数名がこっちに向かって来る。

麗「・・・紫藤・・・」

鞠川「行けるわよー」

孝「もう少し待つてください」

鞠川「前にも来てる、集まり過ぎると動かせなくなる

孝「踏みつぶせば良いじゃないですか」

沙耶「この車じゃ、何人も踏んだら横倒しよ」

孝「んぐぐ

孝が飛び出そうとするのを麗が止める。

麗「あんな奴助ける」と無い

孝「麗、何だつてんだよいつたい」

麗「助けなくていい、あんな奴死んじゃえぱいこのよ

そして紫藤達が車に乗る。

孝「静香先生」

静香「こきまく

鞠川先生はアクセルを踏んでバスが走り出す。校門に近付くと 奴ら の数が増えるがそれを轢き殺して俺達は藤見学園と言つ地獄を抜け出した。

第5話 あばよといつあ～ん・・・なんか違う？（後書き）

作者「長かった～久々に疲れた～」

晴「普通じゃね」この位、お前がただサボってただけだろ」

作者「そんな事・・・無いとは言えない」

晴「所詮その程度つて事だろ」

作者「死ねー・・・ゴハツ」

晴「ふー、次回もみてくれよー、じゃーな

作者「感想・・・待つてま・・・す・・・ガクツ」

第6話 「俺が！」の世界の神になら「…………」のセリフなんか厨二病じゃない？

タイトルの言葉『スノートの夜神』やがみ 月の言葉らうじとで、聞いた時に思った感想です。

でわでわ、本編をビューブルwwwwww

第6話 「俺が」の世界の神になら「みんな」のヤリツなんか厨二病じゃない?

藤見学園を出た直後に紫藤がリーダーが必要だとぼやき始めたその時の麗が孝に言った言葉が気になつた……「後悔するわよ、絶対に助けた事を後悔するわよ……俺は少し眠りに着いた。

俺は誰かの声で田覚める。

金髪「だからよー、このまま進んだって危険なだけだつてばー、だいたいよお、なんで俺等まで小室に付き合わなきゃならねんだ!、お前ら勝手に街に戻るつて決めただけだりょー、学校ん中で安全な所を探しやあ良かつたんじやねーのかー?」

暗男「そつだよ、どこかに立て籠もつた方が、やつちのパンダーとか」

そこ今まで雪つとバスが止まり静香先生が運転席から顔を出す……ぐつう、頭打つたー

静香「いい加減にしてよ、こんなんじや運転なんて出来ないー。」

静香先生の胸がかなり揺れてうつしやる、しかも怒つている笠なのに可愛い。

金髪「んだよ」

毒島「なうば君さうしたいのだ?」

金髪「くつ、気に入らねーんだよ、こいつが気に入らねーんだ！」

そう言つて孝を指さす。

孝「何がだよ、俺がいつお前になんか言つたよ」

金髪「てめー！」

金髪は孝に殴りかかる、それを俺が鳩尾にボディーブローを入れると金髪は倒れ込む。

晴「吹いてんじゃねぞ、ボケが、学校で安全な場所に居れば良かつただあ、自惚れんなよ、このバスのエンジン掛かってる時点でどうか行くのは決まってんだろうが、それを、後から必死に乗り込んで来たのはテメーだろが、俺達の気まぐれで助かつたくせして、デカイ面して、孝が気に入らねー、とか言つてんじゃねーよ、カスが」

と金髪に吐き捨てる様に言つ、そこに紫藤の拍手が鳴る。

紫藤「実にお見事、素晴らしいチームワークですね小室君 東雲君、あー、しかしこうして争いが起こるのは私の意見の証明にもなつていますねー、やはり、リーダーが必要なのですよ、我々には」

沙耶「で?、候補者は1人きりってわけ?」

紫藤「私は教師なのですよ、高城さん、そしてみなさんは学生です、それだけでも資格の有無ははつきりしています、私なら・・問題が起らない様に手を打てますよ」

晴「勝手に一人でリーダー」
「やつてゐ、これからは、自分の力

で生きて行かなきやならないんだ、俺はこんな親の七光ヤローがり
一ダ一なんて認めねー」

そう言い捨てると助手席から外に出ると麗も付いて来た。

孝「麗、晴」

孝が助手席から呼ぶので振り返るとそこにはバスがスピードを出し
て迫るのが見えた。

晴「つー、孝ー、バスが迫ってるー！」

孝「えつーー？」

孝が中に戻り静香先生に伝える。

晴「麗、トンネルに入れ！」

麗「うん」

俺達2人はトンネルに走り込むとギリギリで倒れたバスに引かれず
に逃げ込んだ。

晴「くつ、孝ー、無事か？」

毒島「東雲君、大事ないか！」

晴「毒島先輩ですか？、こつちは大丈夫ですー、みんなは？」

毒島「みな無事だー、つーくつー

晴「警察で、東署で落ち合いましょうー、午後7時にー、今日はもう無理だから明日のその時間でー！」

そのまま俺は振り返り麗とトンネルを走り抜けるとその先は土手でそこで少し息を整えると。

麗「あやつー！」

尻もちをついた麗にヘルメットを付けた 奴ら が迫る。

晴「おー、うああああーーー！」

首の付け根辺りに木刀を叩き込むと吹き飛ぶ、そいつに木刀を向け言い放つ。

晴「なに俺の女に手出してんだボケ、殺すぞ・・・ん？、もう死んでるか？、でも動いてるしー・・・うーーん」

麗「／＼／＼／＼

晴「それより、ほら、行くぞ麗」

俺は麗に手を差し伸べる、それを麗は笑顔で手を取り立上がる。

麗「街まで歩き?」

晴「いや、さつきの奴、ヘルメ被つてたからバイクがそこいら辺にあら筈だろ」

そう言つて辺りの土手を探すと下にあつた、それを持って俺達は土手に上がりエンジンの調子を確かめる。

麗「免許もつてたけ?」

晴「よく歌にあるだろ、盗んだバイクで走り出すって、それと一緒にで無免許上等」

麗「なによ、それ、フフフ」

そのまま俺達はバイクに乗り走り出す、麗が嬉しそうに強く抱きつく顔が印象に残つた、いやでも、あんな可愛い顔で抱きつかれたらぴ――――――・・・・すいません取り乱しました、なんか放送禁止用語が多々ありました。

そのまま暫く走り続けると、バイクを止める。

麗「誰も、いない」

晴「みんな逃げたか、死んだか」

麗「死んだらみんな、奴ら になるじゃない」

晴「たぶん、追いかけて居たんじゃね?、逃げた人達を」

麗「ん、晴、あれ」

麗が指さす方向を見るとパートカーがのフロントが見える。

晴「パートカーか、でもなんであんな所に居るんだ?」

麗「見回りとかじゃ無い？」

晴「まあ、行つて見るか」

バイクをそこまで走らせる、そこには後ろにトラックが突込んでひしゃげたパートカーと死体の警官が居た、それに近づく。

晴「多分、拳銃とか何か無いか調べよつ、そつちの奴頼む」

麗「うん、わかった」

晴「有つたのはこれだけか」

警察に一般に支給される弾倉が回転式の拳銃と3段ロットに手錠と弾が5発があった。拳銃と弾は俺が装備、残りのロットと手錠は麗が持つ。

晴「まあ、妥当だな、んじゃ行くか。げつ、ガソリン切れ掛けてるし」

麗「近くにガソリンスタンド無かつたっけ？」

晴「そうなのか?、じゃあ行つてみつかな

そして俺達はバイクでガソリンスタンドを目指す、その後ろに 奴
ら が迫る事を知らずに。

くそー、堪らんぞこの胸の感触――、ぴ――

――・・・・・

第6話 「俺が」の世界の神になら「みんなが厨二病じゃない」と

作者「なんか最初のチート設定が意味をなさない」

晴「下手だからな・・・もともと素人にはムリだろ」

作者「五月蠅いぞ、貴様など俺の手でいくらでも改造出来るんだぞ！」

晴「」のキャラお気に入りの癖に

作者「くそー憎い」の男が憎いー

晴「でもホントにチート無いよな」

作者「でもこんな感じで続けて行くぜー」

晴「」んな作者（片腹痛い）ですがこれからもよろしくお願ひします

第7話 夏の田ん園は見ても意外に興奮する（前編）

春さんの感想によつ。

これからセリフの前の名前は書かない様にしたいと思ひます。

タイトルはなんとなく思いつきで書いてみました。

ではでは、本編をビックリ

第7話 夏の甲子園は見てると意外に興奮する

俺達は少し走り続けると明りが灯つたガソリンスタンドを見つける。

『お、あつたぞ』

「これで、ガソリンは大丈夫ね」

バイクを止めて気付く。

『なに!、新型だとい』

「……………ビーツしたのよ?』

『いやなんか、セルフ式で、金は学校に置いて来たままだから金無くて』

「お財布、鞄に入れっぱなしで私も持つてないの」

『そつか、じゃあー仕方ないからパクるかな、麗も一緒にこいつ

「えつ、でもバイクこのままだと誰かに取られるかも」

『バイクより、麗が捕まつたら危ないだろ』

「うん／＼／＼／＼／＼

そのまま2人で休憩所にあるバーコードリーダーのボタンを押すが開かない、近くの椅子で打ち壊す。そこから6万円ほどを麗に預け

2千円を持って給油ノズルの場所へ行くすると男が飛び出してナイフを俺に向ける。

「にーちゃん、良い彼女、連れてんじゃねーか

『はあー、で?、何、ナンパですか、好きだねおっさん?』

「うるせー、にーちゃんこのバイクとその女、俺に寄こせ

『バカじやねーの、麗もバイクも勿論、金も命もお前に一つだってヤル物は無い、失せる!』

「ああ、ざけんなよ、このバイクぶ壊すぞ!」

『ギヤー、ギヤー、うるせな、やつたと失せねーと、テーマの命奪つぞ』

俺は木刀を構えると男が後ずさる。

『ナイフと木刀、どっちが有利かアンタにも分かるだろ?、麗、ごめんけどガソリン入れてくれ』

「わかった

「晴、終わったよ」

『わかった、じゃーな

そのまま俺達は走り去る、奴らが来る前に。

『麗、そろそろビニカで休もうぜ』

「でも、先輩達と約束が」

『多分今日までに着くのはムリだ、だから今日は休んで明日の為に寝ておこう』

「うん、わかった、でもビニで休むの?」

『それは大丈夫、近くに前、住んでたじーちゃんの家があるから』

「そりなんだ、でもお爺さんの家の鍵は?」

『それも問題無いよ、家を空ける事が多かつたからスペアキーは置いてある筈だから』

そして家に着き、家中に入り布団を敷いて寛ぐ。

『 ここからなら、橋まで一直線だし、堀も高いから 奴ら が入つて来る事もないから安心して眠れる筈だ』

「 晴のお爺さんの家があつて良かつたね

『 ホントは別荘見たいにポンポンいろんな場所にあるんだけどね

「 晴のお爺さんて何してたの?』

『 確か、原油会社の社長だつたり薬品会社の社長とかパイロットの機長に・・・なんか挙げたら切りが無いよ』

「 お爺さん、凄い人なんだ」

『 ただ、ハチャメチャなだけだと思ひなさ』

「 それでも、凄いよ

『 ハハハ、ありがと、そろそろ寝よう、おやすみ、麗

「 うん、おやすみ」

そのまま俺達は眠りにつく。

今日だけでいろいろあつた。奴らの出現に地獄の時間・・・そして親友の、永の死、

でも永は最後まで人間で在りつと頑張った、その結果、永は屋上から自分で飛び降り

た、孝も初めは止めた。それでも永は人間で有る事が誇りで、人に苦しさを押しつけ

ない為に自分で飛んだ、晴はこの事をまだ知らない、でもわかる晴は、永の事を褒め

る、誰よりも友達を大事にするから。そして脱出した後、私はバスを降りる気だつた、紫

藤となんか一緒に行動するなんて嫌だから、でも晴は私の考えが分かるかのように紫

藤に罵倒を浴びせバスを自ら降りた。その後を私は追いかけた。そして孝達と別れて

トンネルを抜けると 奴らが私に迫る。それを晴が蹴散らして行つた。言葉が私の思い

を強くする、私は晴が好き、昔から私が危ないと必ず助けてくれる、でもまだ告白はし

ない。晴から言つまでこの気持ちはまだ伝えない。いつか絶対言わせてみる。

麗 s.i.d.e E N D

第7話 夏の甲子園は見てると意外に興奮する（後書き）

作者「まあまあの出来かな」

晴「最後結構きつかつたぞ」

作者「俺もきついかなって思つたけど、大丈夫じゃね？」

晴「せんせん無事じや無い」

作者「でも、これが俺のクオリティー」

晴「死ね」 ガスツ

作者「ぐぼつ」

晴「これからはちょくちょく番外編とか書くと思つぜ、よひしづくな！」

作者「俺、ふつゝ、ぐはつ！」 ボキッ

番外編　思い出はあの空に消えた・・・なんか臭いセリフだ（前書き）

この前話が短いので付けたし見たいな感で

なんとなく番外編を書いてみた。

番外編 思い出はあの空に消えた・・・なんか臭いセリフだ

「ほり、晴、早く来なさいよ」

『ムリ言つな、前が見難いんだ、もつとゆづくら歩け^{みじく}』

ある屋下がりの男女一人の光景、もとい、俺と沙耶の奴隸と主の関係とも言つべき光景が街の人目の目を引く。なぜこんな事に為つたかと詰つて、昨日の夜に遡る・・・

『・・・・・おい、なんでそうなるんだ』

受話器を耳に当て電話の主、沙耶に問いかける。

「だから、この前授業サボつてその言い訳したの私なの、だからそのお詫びに明日買い物に付き合つてついてくるの」

沙耶はなぜか怒った口調で俺に言つ。

『だからあれは仕方なくサ・・・んんっん、休んだんだ仕方ないだろ』

ボロッと本音が出る所で咳払いをして』まかす。

「今、本音出そつだつたじゃない。そつ、なら先生に向してか・・・・ばりすわよ」

電話越しの篠なのに田の前に沙耶のニヤケた顔がチラつく。

『セロシ、～～、くそつ』

「明日10時に迎えに行くから起きてなさいよ、じゃあおやすみ」

「はいはい、じゃな」

そして今に至る。現在12時半を過ぎた所で、俺は靴や服、その他アクセサリーの入った箱や紙袋を抱えて沙耶の後ろを追いかけている。

『沙耶、そろそろ腹減つたからどうかで飯にしようぜ』

「大丈夫よママに良い店予約して貰つたから」

驚愕する、なぜ驚くかと言うと、小学校の高学年時に一度食事に誘われた時に1品づん十万する店に招待されて困った事を思い出す。

『沙耶、聞くがそれって、上流階級が行く店じゃ無いよな』

「大丈夫よ今は私も確認して大丈夫だつたから」

『大丈夫かよ』

『大丈夫じゃなかつた』

ホントビックリだわ、お前ら庶民がこんな所居て良い場所じゃねーよ。

「なによこの位普通じゃないの」

『俺の許容範囲超え過ぎてるよ、もう一杯一杯だよ、何なの俺なんかしたか』

頭を抱えて頃垂れる、その視界の端に沙耶の悲しそうな顔が映る。

「・・・」

『…………ほりとつとと食つて行くべし』

「え、でも嫌いなんじや」

『もう慣れる。これからはもう嫌がらんからさつせと行くぞ』

沙耶の頬が緩み可愛い笑顔が一瞬見える。

「ふつ、ふん当り前よ」

『くそー、もう来たくなー』

先程の店から少し離れた公園のベンチに腰掛ける。

「あの位でだらしないわね」

『沙耶みたいにあんな所に行き慣れてねーから仕方ねーだろ』

荷物は沙耶の父親の組の人が家に運んで今は手ぶらで休んでいる。

『でー、どうすんだこれか?』

「・・・・・」

驚いた顔で俺の顔を見る。

『まだ毎週、だぜ、時間まだあるだろ、これからが本番だぜ』

俺はそもそも当たり前の様に沙耶の顔を見つめ返す。

「何よあ、当り前でしょ」

沙耶は嬉しそうに顔を赤らめてそっぽを向いてしまう、そんな沙耶を見て苦笑いをしたあと手を掴んで走り出す。

『まいり行くぞ』

そのまま俺達は隣町の遊園地に動物園、ゲームセンターほかいろいろを楽しんで帰った、その帰り道で・・・

「今日はありがと、ちょっと楽しかった」

後ろを向いていないのでちゃんとした顔は見えないが、沙耶の顔が

容易に想像できるのは長い付き合いからかそれとも俺が沙耶に気があるからなのか今の俺には分からぬ。でも今はこんな気持ちも良いと思える事が何だか嬉しい。そんな感じで家の前の門に着く。

『いいまで良いよな、じゃあまた明日学校でな』

そう言って俺は沙耶と別れた。この数日後にしてが終わってしまった事を俺はまだ気付けて居なかつた

その日の帰り道、暗い夜道に桜が散つて綺麗で何かを予感させるこの気持ちは・・・・・一体なんだろ・・・・・

番外編 思い出はあの空に消えた・・・なんか臭いセリフだ（後書き）

作者「どうもー今回も無事書き終えた作者でーす」

晴「ネタにされた主人公でーす」

作者一何?、どうしたの?

晴 - ハルセキ
死んでいたアス

作者「なんだよそんなに恥ずかしいのか?」

晴ノアしたゞこんなの」

作者・これが世の間く・天命』とか・神の声』だから仕方ないわ」

晴
じ
ん
て
語
ひ
る

作者

甲子年正月

第8話 書い時は開かねこころ・・・その後は知らんが（前書き）

びつむへ、今日も更新に勤しむ作者です。

なんかネタが無いので読者の皆様のリクエストがあつて作者が暇で書けたらジャンジャン書いてみたります。

なので時々で良いのでリクエストしてくだけ。

では本編をびーぞー（今回も短いかも（・_・））

第8話 眠い時は眠ればいいさ・・・その後は知らんが

『ふつ、ふああああああ

俺は縁側で朝日を浴びながら大きな欠伸を零し体を伸ばす。

『「うしつ、これで体は大丈夫だな。麗は・・・まだ寝てるのか』

縁側から振り返ると布団に包まり寝ている麗がいた。

『かわいい顔で寝やがって』

麗の隣に腰を下ろし麗の寝顔を見る。ほんの少しだけ幼さが残るが学園内で上位に入る美少女、だが心のどこかで留年した事が・・・待てよ、紫藤に対する麗の態度、あれは確かに嫌悪があった。ここで一つの仮説がたつ。紫藤が何らかの手で麗を留年させたのだとするとあの態度や反応が納得いく。紫藤のヤロー、次会つたら覚えてろよ。そして麗の頬に手を置く。

「ん・・・晴」

『へえ・・・れ、麗、こ、これはだなそのー・・・えーと』

麗が突然起きた事に驚く。紫藤と麗の事について考えていて気が付かなかつた。

「おはよ」

『・・・・ハハ、うん、おはよ』

彼女の微笑みは何だか俺の心をぽかぽか暖かくさせた。

『そりそり、出発する・・ぞ・・・・・』

麗が起きると、俺は咄嗟に振り返る。

「どうしたの」

『い、いや、その・・・制服に着替えてくれ・・』

そう麗に今の格好は・・・裸シャツだったからだ。麗の服は血が付いていたからこの家にある筈の俺の着替えが”なぜか”シャツしかなく、やむなく貸した・・・ちなみに、ちゃんと部屋は分けて寝た。

『よし、行こう』

「うそ」

その後、麗の着替えが終わりバイクにまたがり走り出す。

暫く走り続けるとだんだん街中が騒がしくなる。そして大通りに差し掛かるところで止まる。そこは酷い惨状になつていた。そこらかしこで車やバス、タクシーが炎上、人が 奴ら から逃げ惑う。極め付けに武装したヤクザや精肉店の店員が 奴ら を笑いながら殺している。

「無茶苦茶ね戦争みたい」

『戦争より酷いかもしけねーな。ここに居たら危ない、合流場所に急ぐ、突つ切るぞ』

バイクを走らせる。すると先まで 奴ら を殺していた人達がこちらを向きショットガンや銃を向けて撃ち始める。バイクのナンバー プレートが弾け飛ぶ中、何とかそこを抜け出す。

「どうして、私達は 奴ら じゃないのに」

あきらかに敵意がある行為で麗が驚く。

『頭に血が上つてるんだろ、俺達も一緒だろ』

「・・・私達と、同じ・・・」

そのまま走り続けると大橋が見えるが、その先は渋滞で直ぐに進めそうにない。そこで右に曲がる。

「何、大橋は真っ直ぐじゃない」

『大橋の方見てみろ、あれじゃいつ渡れるか分かんねーから』

バイクを止め大橋を指さす。麗は大橋に目を向けるとその状況が直ぐに分かった。

『おんべつ橋に向かつて沙耶達と合流しよう』

そしてバイクをまた走らせる。

沙耶 side

「マジやばいわよ

「なにがだ」

小室には意味がわかつてないらしい。後ろで紫藤が私たち以外の生徒を洗脳している。

「確かに、あれではまるで新興宗教の勧誘だ」

毒島先輩が私の意見に賛成するが少し違う。

「まるで”じゅ無くて”まんま”その通りよ、話を聞いてる連中

を見てみなさい。宗教カルト紫藤教の始まりを題にしてゐる、私達は

「道がこの有様ではバスを捨てて逃げるしかないな。なんとかおんべつ橋を渡つて東へ向かわないと東雲君との約束がある」

先輩がここまで晴との約束を重視するには何か理由があるのかしら、意を決して聞いてみる。

「ん、随分と晴のこと気にするじゃない。自分の家族は心配じゃないの」

先輩は思考顔をやめ、「うちを向く。

「心配だが家族は父一人だし、国外の道場にいる、つまり今の私にとって東雲君との約束以外に守るべきは自分の命だけなのだ」

「うぐい

「そして父からは、一度した約束は命に代えても守れと教えられた」

「」やかな微笑みが直視できずに手を反らす。

「へええ

「すごい父親ですね」

そこで鞠川先生が話に加わつて来る。

「みなさんお家はどこなの」

「小室とかと同じねたべつ橋の向い

「う」とカタも話に加わる。

「ああ、僕も近所に両親いないんで、高城さんと一緒になうりででもするとカタも話に加わる。

最後の私に着いて来たい発言がキモくて引いてしまう。そのまま平野の家族の事を聞いた、なんだか古いキャラ設定にシッコんでひと時の癒しがあった。

「で、どうするの、私も一緒に行きたいから」

その言葉に少しづづくつする。

「いいの」

「私はもう両親居ないし、親戚も遠くだし、ひとなこと叶いつやいけないけど、紫藤先生あまり好きじゃないの」

それのみんな笑ってしまう。そして私たちこれからはこの事を決める。

晴、生きてよ。じやないと死んでやるから。

第8話 眠い時は眠ればいいさ・・・その後は知らんが（後書き）

作者「なんか side の話結構難しいー」

晴「なんか結構ガタガタだしな」

作者「くそつ、なんかネタ転がつてねーかなー」

晴「俺がここで死んだら次行けるぞ?」

作者「バカ野郎、まだお前のストーリーのHENDはまだ先だー!」

晴「どうせ碌な終わりじゃないだろ」

作者「そそそそんなわけなないだろ」

晴「ボロ出まくりだ

作者「まつまー、次回もよろしくー」

晴「何終わらせんか」「ゴスツ、ドガツ、バキッ

第9話 冷たい物を大量に食べても腹を壊す確率は低いかも…（前書き）

お気に入り登録件数が日に日に増すこと嬉しさを覚える作者です。

この頃作者の作品が人気がある事が不安です。

でも、みなさんが呆れず読んでくれる事を願つて更新頑張ります。

では本編をぞーぞー！

第9話 冷たい物を大量に食べても腹を壊す確率は低いかも！

俺達はおんべつ橋に着くが、そこも大橋と同じで規制されていて直ぐに渡れそうにない。

「いいとも同じね」

麗が橋を見ながらつぶやく。

「どうする他の橋を試してみる」

『たぶんムリだ。それじゃ規制してる意味が無いから、だからまだ孝達も渡つてないはず。だから少し上に行つてバスを探してそのまま合流した方がいいと思う』

俺達がもし最短ルートで来たとしたら、静香先生達は遠回りして別ルートで来た筈。最短で來てもこの感じならまだ橋は渡れてない筈だ。

「そうね、探して・・・」

急に発砲音が耳に入る。

「つ、銃声」

『いや違う、でもこの音どこかで聞いた事がある・・・そつだコータのガス式の釘打ち機の音だ。麗、行くぞ、掴まれ』

バイクを走らせる音が近くなる。橋の下に車両運搬トレーラーが

見える。

『麗、舌噛むなよ』

そのまま「丽」とバイクのスピードをだんだん上げる。

「ちょっと、晴」

そのままトレーラーに乗り上げ橋に向かつて飛ぶ。見事着地と同時に数匹の 奴ら を轢く。すると麗がバイクから飛び降り 奴ら にモップの柄で倒し孝の援護に向かつう。

『コータ』

バイクに乗りながらコータに拳銃を投げると俺が横を通り過ぎたギリギリで発砲する離れ技を披露する。

『double tapだぜ』

そのままコータの前を通り過ぎると沙耶と静香先生の前の 奴ら を後輪で轢き飛ばし毒島先輩のもとに向かつう。

『毒島先輩』

俺は手を出し先輩の手を掴んで先輩を軸に回転する。その遠心力を使い先輩を投げ回転した勢いで 奴ら を吹き飛ばす。

『すい』

「粗方片付いた様だな」

周りには 奴ら の姿を無い事を確認する。

「手強かつたわね～」

「あんたは邪魔しかしてないでしょ」

先生の呑気な発言に沙耶がつ込む。

「先生」

「あらあら西本さん、土偶ね、東雲君も」

麗が先生に飛びつく。先生「土偶」ではなく「奇遇」ではないでしょうか。

「と」のす大橋もダメだったんだな

毒島先輩が大橋の事を聞いて来る。

『ええ、行き場無しつて感じです』

「ならばまじや、無事で何よりだ東雲君」

『毒島先輩も』

するとむくれた沙耶が割り込んで来る。

「わ・た・し・は」

『分かつてゐつて、そんなこむくれるなつて』

沙耶の頭を撫でる。なんだか先輩と麗の視線が俺の手に注目する。

「晴、無事で何よりだ」

『孝、お前も無事で何よりだ。コータも・・・』

「晴～、じつしたの、じつしたの～、予備弾は、これ警察で配備されてるスミサンンドウヒッソンのM37・・・・」

「道路が封鎖されているのでバスから降りたが渡河する方法を見つけられないでいる」

今はさつきの状況から時間が経ち橋の下で状況確認する。

「川は増水してるし、上流に行つても無理でしょうね

「じゃあどうすれば」

先輩、沙耶が渡河する案を出し合ひ。

『今日はムリだろ、どつかで休もつや』

「ちよ、アンタ、少し案を出すなやこよ」

沙耶に怒られるが正直な気持ち、そこは先生が手を擧げる。

「東雲邸の言つ通り、今日はまつお休みにした方がいいと思つの」

「お休みつて」

「コーダが呟く。コーダ俺も思つて流石に呑気過ぎると嘔つてやつた
い・・・人の事言えねーけど」

「あのね、使えるお部屋があるの。歩いてすぐの所」

「彼氏の部屋」

沙耶が呆れた感じで言つ、すると先生が慌て始めながら弁解する。

「ち、違つわよ。女の子のお友達の部屋だけど、お仕事が忙しくて
いつも空港とかに居るから、鍵を預かって空氣の入れ替えとかして
るの」

沙耶とコーダが先生の顔を意地悪顔で見詰める。なんか先生の格好
が目に浮かぶ。

「マンションですか、周りの見晴しは良いですか」

「コーダが質問をする。

「あ、うん、川沿いに建つてるメゾネットだから、直ぐ傍にコンビ
一もあるじ。あ、後ね車も置きっぱなしの、戦車みたいなの、こ

ーんなのよ

先生が手を広げて大きさを表現するがいまいち掴めない。

「確かに今日はもうクタクタ、電気が通つてゐる内にシャワーを浴びたいわ」

沙耶が髪を搔き上げながら囁つ。

「わつそうですねー」

そしてコータは沙耶に蹴られる。

「こ」のスケベ

『んじや、先生と確認に行つてくる。静香先生乗つて下さー』

俺は先生を呼びバイクのエンジンを掛ける。

「あ、うん」

乗ると先生が”なぜか”強く抱きつきその豊満な胸が背中に当たる。その時俺は何か突き刺さる視線を感じた。

そして俺達は場所の確認を済ませみんなで先生の友達の家に着いた。そして家の前に止められたハンヴィーに驚きつつも中に居る奴ら

を倒し一時の安息を得た。ここで俺達が初めて攻めにでた事は疑問に為らなかつた……

「楽しそうだな」

「ブスツとして不機嫌そうに孝が呟く。

「セオリーを守つて覗きに行く

コータがカギ穴に針金の刺して弄くりながら言ひ。

『今行つたら確実に死が待つてるがな』

本棚にある本を手に取りペラペラ流し読みをしながら俺は言ひ。

「つ、俺はまだ死にたくない」

孝とコータは今2つある謎の金庫を物色して一つを開けて2つ目に取りかかっている最中だ。

「これで何も入つて無かつたら、頭痛いな」

「入つてるよ、弾薬はあつたんだから、絶対に

「まあ良いぞ、行くぞ」

孝達がバールで金庫をこじ開けるように体重をバールに乗せると金

庫がこじ開けられる。その拍子で2人がこける。

『なんかみつけたら教えてくれ、他の場所探して来る』

『う言つて階段を下りて行く。なんかコータがハイテンションになつているのが声が聞こえた。』

『なんかね～かな～』

部屋を隅々までみて回ると何かに躊躇を扱ける。

『ぐわつ、つててー、ん?』

その扱けた原因を見ると不自然な細長い木の箱があった。

『なんだこれ、え～と、なんか凄いもんみつけー』

それをもつて階段を上がつてコータのもとに行く。

『おーい、コータこれみつけたんだけどー』

『89小銃一、自衛隊で採用されてるアサルトライフル・・・・・・』

・

『ふーん、下でマガジンでついつつかつのか、みたいな物も見つけたぞ』
黒くて少し曲線のケース見たいなのを渡す。

「それは自分で弾込めてね。ほらそこにあるか？」

『へーい。ん、どうした孝』

「いや今、外がヤバい状況なんだよ」

『あ、孝』

「へつ」

すでに遅かった。魔の手が孝を捕まる・・・静香先生だけど、そのあと先生が酔った勢いでキス魔になり孝とコーダが襲われた。

「晴く～ん」

なぜかその魔の手が俺にも伸びる。艶やかな格好で近付きハグ、甘美な吐息が耳を擦る。そして風呂上がりのシャンプーの良い匂いが鼻を擦る。そして火照った唇がだんだん近付いてくる。

「ん～～」

『しかた無いですねほら、ちゅつ』

そして俺は先生の唇に自分の唇を合わせる。最初は先生も驚いていたが後からにこやかになり眠り始めた。そのまま先生をお姫様抱っこする。

「は、晴、お前結構、大胆だな」

顔を赤くして「あべしゃくしながら聞いて来る。

『そりゃ、女性からキスを求められたらしてやるのが男だろ。俺、先生寝かせて来るから行くから、見張りよろしく』

そのまま下に降りる、と目の前に麗が居た。

「なにしてるのよ」

なぜか立腹の様子の麗さん。

『いやー、特に何もー』

すると麗が近付いて来る、すると。

「わあー、晴が3人いるー」

かわいらしい微笑みでそう言つて来る。

『はあ』

なんだか麗まで酔つているみたいだ。

「いきなり増えたー」

と言つて尻もちをつく麗。

『酔つてんのかよ』

「だつて疲れちゃつたんだもん。たつた1日でなにもかも可笑しく

なちやうじ、お父さんと連絡も取れないし、永も死んじゅうじ、う
つ、・・・・・うつく・・ひつ・・ひつ

そう言つて泣き出す麗。ひとまず静香先生を寝かしにリビングに運
ぶと沙耶もソファーで寝て居た。はがれた布を掛けなおす。

『良い夢を』

喉が渴いたのでキッチンにある冷蔵庫に向かう。中にはカーネルやお
酒、酒の摘みなどがあった。その中でオレンジジュースを持つと先
輩に声を掛けられたので視線を向けると・・・・裸エプロンの先
輩が料理をしていた。

『へえ、えつえええ』

『どうした』

『いや、じうじたも何もー』

「あ、ああー、これか。合つサイズの物が無くてなー。洗濯が終
わるまで誤魔化して居るだけだが、はしたな過ぎた様だな、すま
ない」

なぜか謝られる俺。この状況で襲われる事を想像してい無い様だ。

『いや、そんなこと無いんですけど、先輩あのーとても綺麗です』

「あ、ありがと」

先輩は顔を赤くして俯いてしまつ。その沈黙が破られる。

「ねえー晴ー、聞いてよー、晴」

麗が階段から顔を出して俺を呼ぶ。

「見てやつた方がいい。女とは時にか弱く振舞いたいものだ」

『先輩もですか』

そんな疑問が口から出てしまう。

「ふふ、友人には冴子と呼んで欲しいよ」

『はい、冴子さん』

笑顔で名前を呼ぶと先輩の顔が赤く見えたのは気のせいだろうか。
そして麗の元に向かう。

その後は麗の愚痴をオレンジジュースを飲みながら、飲ませながら、
話を聞くと目に涙が溜まり始めた。

『ほりつ、麗おいで』

俺は涙目の彼女が堪らなく愛おしくなり彼女を抱きしめ。彼女は俺の胸に顔を埋め（うず）泣き始めるそんな彼女が顔を上げる。その彼女の唇に深いキスをする。そして一度唇を離すがもう一度キスをする今度は唇が触れるだけのキス、そしてだんだん気分が高揚する。
・だけど・・・

『 ここまで、これ以上は抑えが効かない』

「ふふっ」

すると犬の吠える声が聞こえる。

「晴・・・外で女の子が襲われてる」

そしてまた俺達の安息は中断させられる。

「この壊れた世界はまだ俺達を窮地に追いやる

そしてまた俺達は地獄に放り出される事になる

る

第9話 冷たい物を大量に食べても腹を壊す確率は低いかも!（後書き）

どうもーみなさん本編いかがでしたかー

面白かったのであれば幸いです、今回はずいぶん苦戦しました。

晴と麗の関係とこれから展開がかなり難しいです。

でも頑張りたいと思います。

これからも作者との小説をよろしくお願いしまーーす!

ではまた次回―――!

第10話 夏にホラー映画は必需品かも（前編）

どもー作者でーす、更新も進んで10話目突入でーす。

これからもジャンジャン更新頑張ります。

それでは本編です！

第10話 夏にホラー映画は必需品かも

『がんばれよヒーロー』

俺は孝に拳銃を渡しながら送り出す。

「止してくれ、俺はヒーローなんかじゃないよ

『それもそうだな、頑張つてこい親友』

ハイタッチをすると孝はバイクにまたがり走りだした。

「何の騒ぎ

『ん、俺達は人だつて確認出来ただけだよ』

沙耶は分からぬ顔をしていたが俺と冴子さん、麗は理解できて笑っていた。

『よし、孝が帰つて来るまでに逃げる準備だ』

そしてそれぞれ行動に移る。

「平野は」

準備を終え居ない「コーダを待つ。

『上じやね』

「つたぐ、二ブインだか、凄いんだか・・・」

そこにコーダが銃と弾を抱えて現れる、それを見てみんなが啞然とする。

『わじびつするよ、つても孝を迎えに行って逃げる以外無いけど』

「わうね、小室を助けて、川の向こうに脱出」

沙耶の提案が出されそれにみんなが頷く。

『それじゃ、行きますか』

そしてみんなハンヴィーに乗り込みエンジンが掛かると孝に群がる奴らに向かつて走り出す。

「うわっ、いっぽい

先生がわたわたし始める。

「と黙つても逃げるわけにはいかないんだから

『う』『う』、起きこつ』

俺と沙耶の声がハモリ車が 奴ら に突っ込みながら、孝のが向かって来る塙の近くに車を止める。

「ちよ、ビijo触つてんのよ

『え、いやどこもつてわけでもないけど』

突撃の勢いで沙耶と麗の方に倒れ込む。その時にこうと触つてしまつた。麗が機嫌が悪そうに俺を睨む。

「川向こう行きの最終便だ、乗るかね」

「もうひりん」

車の上で先輩と孝がやり取りをする。そして俺達はその場を後にす。川に向こう途中、俺と孝、麗、冴子さんは疲労から少しの仮眠を取つた。

気持ちよく寝て居ると急に激しい痛みが頬に走る。

『じきやああああああ』

奇声をあげて俺、起床、すると田の前に麗が不満そつひつちを見ている。まだ頬が痛い。

『いはい、いはい、でふ〜』

そつと麗は手を離してくれる。ジンジンする。

「いいじ身分じゃない」

『なに・・が・・・・へつ』

俺の膝で冴子さんが幸せそうに寝て居たらしい。寝ぼけ顔の冴子さんがこちを見る。

『あの〜、ミダレが垂れます』

冴子さんは一瞬で意識がはつきつして口元を拭つ。

『孝起きひ』

テンパつていた俺は孝の耳を引っ張ると一発で起きた。でもかなりの間転げ回って居た。

「バカやつてないでさつさと降りなさいよ

そして俺は外に出るともう川を渡つた後でもう朝だった。俺は川にタオルを持って行く。

『くは〜、気持ちー』

顔を川の水で洗う。水がとても冷たく感じた。みんなの居る場所に戻ると孝にコーダが銃の打ち方を教えている所らしい。

「一度聞いたつて分かんないよ

丁度孝がコータの話を聞かずごどこに行ひます。

『おいおい、そりゃないだる、ちやんと打ち方聞いとけて』

「晴、俺にそんなのムリだよ

『これから、武器に頼るんだ面倒』とを後に回すな

「・・・・・はあー、分かつたよ

その後、孝はちゃんとコータの話を聞いてちやんと理解してくる。

『なあ、これはどう扱うんだ』

俺はウロウロしていた時に見つけたアサルトライフルを持ち出す。その後コータ先生の銃の扱い方を聞いて使い方を理解した。

「小室ぢつしたの・・・・・」

『ん、ぢつしたんだ、2人・・・・と・・・も・・・』

振り返ると着替え終えた女の子組が居た。

「あははは

「うふふふふ

「わん

孝、コータ、ジークの順で声が漏れる、ジークは昨日女の子、も
と言い希里ありす、ありすちゃんと一緒に助けた？犬で名前はコー
タが付けたらしい。なんでもアメリカ軍がつけた零戦のアダ名づけ
い。その後は土手の上の安全を確認して車を移動させた。

「これからどうするの」

先生が窓から首をだす。

『ここからは沙耶の家が近いから、まずは沙耶の家だな・・・だけ
どさつ』

「わかつてゐるわ、期待はしない」

俺は沙耶の頭に手を置く、そして俺達の行先は決定した。

『へつ、ことも、居やがる、左だ、左

田の前には 奴ら が道を徘徊している。

「何なのよ、東坂2丁目に近付くにつれて 奴ら が増える一方じ
やない」

そして角を曲がると田の前に 奴ら の壁があつた。

「！」のまま押し退けて

沙耶が先生に言つ、麗が何かに気が付く。

「だめ、だめよ、停めてええ」

奴らの向こう側にワイヤーが張つてあつた。だが停まれるわけも無く、なんとか車体を横にして何とか車にそこまでの衝撃は無かつたがタイヤが滑つてタイヤがロックしている。コーダが何か先生に言つが耳に入らなかつた。車が走り出すと今度は急停止した。すると体が浮いて麗と共に落ちる。その時に麗を庇つて俺は腰をボンネットに打ちつける。

『かはつ・・・・んぐつあ』

肺の酸素が打つた時に押し出されて、まともに力が入らなかつた。

「晴、くつこの」

麗が飛び降り俺に迫る 奴らを倒す。孝も車から降りてショットガンを打ち始める。先輩も木刀で応戦し始める。

『ん、ぐつ、はあはあ』

俺は力を入れてなんとか壁に寄りかかるがそれ以上の力が入らない。そのまま俺は意識が無くなる。

第10話 夏にホラー映画は必需品かも（後編）

みなさんどうでしたでしょうかー

「都合全開な感じで書きました。

最後は辺とか作者が思いつきを書くと酷くなりそうだったのでボツにしました。

でも後悔がちょっとだけあります。

まあこんな感じで更新していくきます。

次回もよろしくお願ひします！！

第11話 薬とかつて結構いい匂い

孝 side end

「はあ～」

あの絶望とも言える状況から1日が経つ。晴が車から落ちてすぐ俺達は助けようと行動した。でもすでに 奴ら によつて囲まれた中、晴を守りながら戦うには無理があつた。そして諦めた時に高城の母親に助けて貰つた。

その後は高城の家・・・いや、屋敷で俺達は疲れを癒している。だが不安がある。晴がまだ起きないので。落ちた時に背中と頭を強く打ち付けたらしくまだ意識が回復しない。

(たくつ、やつと起きろよ、バカ)

そんな事を思いながら俺はありすちゃんと先輩と会話を楽しむ

俺は何かの怒鳴り声で目が覚める。たくつ誰だ・・・よ・・・待て

孝 side end

確か俺は車から落ちて倒れたはず。何で生きてんだ、誰かに助けられたのか。

俺は寝てこる体を起しそうと力を入れる。だが瞬間に背中に痛みが走る。

『つーーーー』

でも俺は痛みを耐えてベッドから起きてドアに壁を伝つて移動する。そのまま外に出ると隣の部屋から話し声が聞こえる。俺は壁を使ってその部屋のドアを開けるとそこには今まで一緒に行動してきた仲間が居た。でも俺が部屋に入つて来た事に気付かず、ベランダで話す沙耶と孝に目が向いている。

沙耶が何か早口で言つている。

「もちろん娘のことを見れていたわけじゃない、むしろ一番に考えた。さすがよ本当に凄いわ、さすがアタシのパパヒマハマ」

沙耶がなぜあんなに取り乱してゐるのか分からぬ、でも止めなくちやいけないと直感した。だから背中の痛みを耐え走つて沙耶を抱きしめる。

『沙耶、まずは落ち着けつて、みんな分かつてゐるから、落ち着け』頭を撫でながら沙耶の耳元で子供をあやす様にゆっくり優しく言い聞かせる。

「は・・・る・・・・・はる・・・」

沙耶はポロポロと涙を流し崩れる様に座り込む。

『よしよし、よく頑張ったね』

その後は落ち着きを取り戻した沙耶が顔を赤くしてみんなにわたわたくし説明をする。その後なぜか矛先が俺に向き説教、その時、沙耶だけでなく麗と冴子さんも加わり酷いことになつた。何でみんなに怒られたかはよく分からぬままだった。

その後、沙耶が自分の父親の話、憂国一心会の話、その父親が今の現実を避難してきた人に実演して見せ付けた。

『何話してんだよ』

俺は沙耶をあやす時の無茶が原因でベッドに寝てて、隣にはありますちゃんがいて会話をしているので暇では無い。

するとコーダが部屋から飛び出して行く。その後に冴子さん、沙耶が部屋からいなくなる。すぐに孝がベランダから出ててくる。

『何か手伝おうか』

「お前が俺に説教でもするってか」

鬼の形相でこっちを睨む。

『腑抜けたお前の顔面ぶち抜く位の無茶はできるひだ』

「あると孝は、我に返る。

「そんな無茶、出来ないくせに」

苦笑いで孝が呟つ。

『親友が道間違えたら直すのが友情だろ』

「なんだよそれ、でもありがとつ」

『わっしりと詫み解決して』

そつまつと部屋から出て行く孝。

「あります、『一ータちゃんとなまなしだす』

『わかった、一ータを頼むね』

頭に手を置くと元気な返事と共に部屋から駆け出していく。色々な感情が渦巻く中、俺達は自分を見失わずに生き抜かなければいけない。そんな現実をこの平和な時に出来た俺達はまだ良かったのかもしない。

第1-2話 結果も努力も関係なく決断の方が大事かも（前書き）

今回のタイトルは本編に若干の関わりがある感じにしました。

今回は作者の妄想を入れて書いたので、沙耶がキャラ崩壊してるとかも…

大事だよね、みんなこれから更新見なくなるとか無いよね……

取り乱しました、では本編をどうぞ！

第1-2話 結果も努力も関係なく決断の方が大事かも

ありすちゃんが出て行つた後、俺は窓の外の空を眺めながら歌を口ずさむ。

「なんていう歌なの」

するとベランダから静香先生が入つて来て、歌を聞いていたらしい。

『昔、ばあちゃんが歌つてた歌で名前は知らないんです』

「今、おばあ様はどうぞ」

『もう居ないんですね。じいちゃんと一緒にポツクリ逝つちゃいました』

「あ、『めんなさい』

先生は氣を遣つて謝る。

『気にしないでください、本当の祖父母じゃないんで』

「どう啦、……」

先生が途中まで言いかけると大声が聞こえる。

『外ですね、行ってみましょ!』

そして俺は先生の肩を借りて声のする方へ向かうと沙耶の父親がコータに何か言つてゐる所だつた。

「俺は、俺はまた元通りになる、元通りにされてしまつ。自分で出来ることがよひやく見つかつたと思つたのに」

コータは銃を抱え涙と鼻水でグチャグチャの顔で言つ。それを沙耶の父親が聞き返す。

「出来る」ととは何だ

その質問に答えたよひつとコータは必死だが声が出ない。するとそこには、

「あなたのお嬢さんを守る」とです

孝がコータの前に歩み出ながら言つ。

「い、小室」

「小室・・・・なるほど君の名前には覚えがある。沙耶とは長い付き合いだな

「はい、ですがこの地獄の始まりから沙耶・・・・お嬢さんを守り続けて来たのは平野と東雲です」

コータは孝と沙耶の父親の会話を聞く。するとあいすけやんがコータに抱き付く。

「彼の勇氣は自分も田にしております、高城会長」

「アタシもよ、パパ」

そしてその場にみんなが集まる。そして沙耶の父親は納得して頷いて去ろうとすると部下が駆け寄つて耳打ちをする。すると沙耶に何かを任せて去つて行つた。

「・・・・・つて分けで誰か一緒に来て」

避難してきた人がまだ現実を理解していなくて勝手に話をしているらしく、それを鎮める役目を「えられたらしい」。

「い、一緒に行きます」

「僕も付き合ひつよ」

「あたしも行くわ」

「一タ、孝、麗が沙耶についていくことになつた。俺はクスリを塗るための部屋に戻ることになつた。

俺はクスリを塗つてベッドで横になつていた。

『ひ・ま・だ』

寝転がりながら呟く。あれからクスリを塗つて貰つて部屋で暇を持て余していた。すると、

「入つていい

ドアの方から声が聞こえた。

『どういわ』

すると入つて来たのは沙耶だった。ビートルが暗い表情で入つて來た。

『どうした』

「さつき避難民に話をしてきたわ」

『失敗だつたか』

無言で頷く沙耶。

『頑張つたじやん』

「えつ、でも失敗したのよ」

沙耶は驚いた顔で俺に言つ。

『失敗とか成功とかじゃなくて、沙耶がどれだけやつたかを俺は評

価したの』

寝ていた体を起こし沙耶を正面から見て言つ。

『俺はお前のこと知つてるから結果だつとそれまでの努力も関係ない・・・実行したかどうかが俺には重要な、だからお前はやつたんだろ、ならいいじゃん』

沙耶が涙目で近付いて来る。その顔は緊張が完全に解けて子供の頃はよく見た顔、いつからか仮面を被つたか覚えていない。でも確かに覚えがある顔だった。

「はい〜」

沙耶はゆっくりと抱き付く。だが背中の方から泣き声が聞こえる。

『なんか久しぶりだな、昔は沙耶が泣きながらよく俺ん所に来てたな』

「知らないわよそんなこと」

むくれ声で言つ。

『そまんまの方がかわいいのに』

「無理よ、パパがあれだもの」

『ハハハ、確かにあれだからな』

そのまま俺達は暫しの会話を楽しんだ。

『そろそろ終わりかな』

「そうね、こんな日が續けばいいのに」

『沙耶が最初に言つたる、無理なんだよ。また地獄に逆戻りだから。でもこんな世界すぐに終わらせる』

「ふふ、待つてるから」

沙耶の顔がだんだん近付いて来る。

『俺、他の娘にファーストキスあげちゃつたぜ』

「壊れた世界なんだから、一夫多妻もいいじゃない」

言つが早いが沙耶と唇が重なる。沙耶の舌が俺の舌と絡まり、いやらしい音をたてる。そんなキスが長く続いた。気付くと俺は沙耶を押し倒していた。

『沙耶これからまた仮面を被るんだな』

「ええ、みんなにこんなのは知られたくないから」

『ホント、かわいいよ』

その後は沙耶が部屋から出て行ってボーッと外を眺めながら、これからはまた仮面の下の沙耶を見れた事に若干の優越感に浸る。

第1-2話 結果も努力も関係なく決断の方が大事かも（後書き）

苦情の感想が来る気がするのは作者だけかな？

でも作者は頑張ります！

次回もよろしくお願いつかまつる！

第13話 旅立つ時はハンカチを忘れずに！（前書き）

どうも、久しぶりですなんかアクセス数ユニークの累計が1万5千越えしてました。

これからも投稿ががんばりたいと思います。

第13話 旅立つ時はハンカチを忘れずに！

『「ひー、完全回復したな。そろそろ孝も準備が終わるだろ』

鞄を持ち屋敷の外にでる。すると松戸さんと一緒にみんなが居た。
孝とマシドさん、「一タが笑い合っていた。

『どうしたんだ』

近くの沙耶に理由を尋ねる。

「パパが孝達に乗り物をあげたのよ」

沙耶が簡単に説明すると、孝達に話しかける。

「本当に行くわけ」

「・・・僕と麗の親だからな沙耶たちには迷惑はかけられなこと。
それにもう沙耶の家が近かつたからだ、覚えてるだろ」

『それに「やよなら」「じゃねーしな』

そこに割り込む俺。

『俺も孝達について行くからな、大丈夫だ』

「え、でも悪いだろ」

『なんだよ今更だな、俺はお前の手伝いするんだ。感謝しろよ』

その一言で孝は納得した。すると後ろからありますやんが汎子さんの名前を呼ぶのが聞こえたので振り返ろうとするとき麗と沙耶に阻まれた。

「「晴は見なくていいの」「

『なんですか』

その後まともに振り返れなかつた、でも汎子さんも一緒に行く事になつた・・・らしい。すると、

「やつた、やつた

先生が飛び跳ねて友達のケーバンを思い出したららしく、孝にケータイを借りようとするとき、麗が走り出す。

「麗どじう・・・そんな・・・あれは」

走りだした麗の先には紫藤たち一行が居た。その近くに走り寄ると話が耳に入る。

「・・・そして私はわかる、成績を操作できるのはあなただけだつて。でも我慢してた。お父さんの捜査がうまくいけば、あんたも”紫藤議員”も逮捕できると聞かされていたから

麗の銃の先のナイフが紫藤の頬に当たり血が垂れる。それよりも俺は”紫藤議員”的フレーズに驚きその後の会話は聞き取れなかつた。

・・・アイツが俺の・・・

「…………でも…………もつ…………」

俺は麗の銃を握み下に降ろす。

「退いて、晴」

低い声で言われるが気にせず、口を開く。

『……紫藤、あんた……紫藤一郎の息子なのか』

俺は周りからは見えなよつに下を向いている。

「え……ええ、私の父です、それがどうかしたのですか」

「そうか、コイツがおれの……」

『……東雲、俺の苗字に聞き覚えありますか』

「い、いえ全くありませんね」

『それでは……東雲 たくみ 巧に聞き覚えありますよね』

「つ……まさか、君は……」

紫藤は額から汗出しながら後ずさりし始める。

『東雲巧、俺の親父、かつてあんたの親父に殺された男の名前だ』

『俺の親父はアンタの親父が汚職してることを知つてた、だからその

事を公表しようとした。そんな時アンタの親父の部下に階段から突き落されて即死・・・覚えてる筈だ・・・なんせお前等が殺したんだからな』

「あ、あれは、私のせいでは・・・」

『同じだ、お前は知つて止めなかつたんだ』

握る拳に力が入る。歯を食いしばり何かを堪える。

「ならば、殺すがいい」

振りかえると高城の父親が歩み出て刀を俺の前に差し出す。俺はそれを引き抜き構える。

「し、東雲君、やめましょう」となの・・・

『黙れ』

大声でそう叫び、刀を構える。

「ひつ、ひいいいい」

刀を振る。

「がはつ」

峰打ちで横腹を思いつきり叩く。

『俺は・・・アンタ等を許せない・・・だけど同じ方法で贖いをさせても・・・親父は戻って来ない、喜びはしない、だから・・・アンタには生きて地獄を味わえ・・・それとこれは麗の分だ』

もう一度峰で背中を叩く。刀を鞘に納め沙耶の父親に渡す。

「それが君の選択か

『はい』

そしてみんなの所に向かう。まず麗に話しかける。

『麗、その、邪魔して、うおつ』

麗が急に抱きついて来る。それをからいで受け止める。

「ありがと、晴」

その後は孝、沙耶、コータ、先生、冴子さん、ジークの順で声を掛けられた。ジークは声を掛けたと言つか顔を舐めただけだが。

「せんせい、お電話かけるんじやなかつたの」

あつすちゃんの一言に先生が孝にケータイを借りて電話をかけ始める。

「あーリカあ、生きてたねー。あたしもいろいろと大変だつたんだけど・・・あそこはもうダメ、あ、鉄砲とか借りしちゃつて・・・」

先生の電話光景を見ていると、上空で何かが光るのが見えた。すると急に周りがざわめき始める。

「小室くん・・・ケータイ壊れちゃった、もしかしたら私が壊したのかも、『じめーん』

「え~~~~」

「どうかしらね・・・まさかこんな時に・・・」

沙耶が何かを呟くと、コータが沙耶に言つ。

「どうしたんですか、沙耶さん」

「アンタは関係ないはず、いいから見張つてなさい」

そつと麗の方に歩み寄るとデジタルサイトを覗かせる。

「んつと・・見えない・・・」

すると沙耶が叫ぶ。

「パパ、計画を立て直さないとダメ、これはきっと・・・」

沙耶の言葉を遮る様に銃声が響き、男の人気が門の所で 奴ら に襲われるものが見える。だが 奴ら は頭を撃ち抜かれる。

『当たったよ』

手に持った銃で撃つと見事にヘッドショットが決まった。

「試射無しで、僕より遠い距離を一発」

「へえー凄いのね、晴くん」

コータと先生は声をかけてくれたが、他のみんなは驚いて声が出なかつたり、感心して頷いてたり、頬を若干染めて何かを呟いていた。

「門を閉じよ。急げ、警備班集合、死人どもを中にいれるな」

「会長、それでは外にいる者たちを見捨てる」と

「今閉じねば全てを失う。やれ」

沙耶の父親が迅速な指示を出し門が閉じられ様とするがリモコンが反応せず手動で閉める、すると一匹入ってくる。

「な、何してんのよ、銃持つてんだから早く殺しなさいよ」

コータに向かって「あなたは撃ち殺す。すると沙耶の母親がスカートの裾を破き銃を装備する。

「アンタは見なくていいの」

「晴、見たらダメだからね」

「東雲君、見れば刀の鑄になるぞ」

沙耶には見たら殺すって目で見られ、麗には背中から銃剣を突き付けられ、冴子さんには刀の刃を目の前にチラつかされた。

『はははは』

俺には笑う事しかできず、すぐに背中を向けた。

「お使いなさい沙耶ちゃん」

背を向けて居るので声しか聞き取れない。

「る、るがーポロ、ストックとドラムマガジンまで

「一タの声のキラキラした聞こえた。

「こんなの使い方分かんないわよ。だいたいなんでママまで銃を持つてるの」

「ウォール街で働いてた頃、エグゼクティブの護身コースに通つてたもの。弾当てるのパパより上手いかもね」

なぜかみんなの頭に浮かぶ光景が一致した気がした。

「撃ち方はあなたが教えてあげてくださるわね、平野くん」

「はいはい、ははははい」

『それにしても、いきなり機械とかケータイが一気に使え無くなつたんだ』

「たしか妙な光の後だよな

「電磁パルス攻撃（EMP）」

後ろから沙耶の声が聞こえて振りかえると説明をはじめる。

「NAME・・・高々度核爆発とも言つわ。大気圏上層で核弾頭

を爆発させるとガンマ線が大気分子から電子をはじき出す「ポンプト」効果が起きる。飛ばされた電子は地球磁場に捕まつて広範囲へ放射される電磁パルスを発生させる。その効果は電子装置にとつて致命的、アンテナとなりうる物から伝わった電磁パルスで集積回路が焼けてしまう

「つまり今、我々は……」

「そう電子機器は使えない」

「えつ、じゃあケータイとか使えないの」

「ケータイどころかコンピューターもまず全滅、電子制御を取り入れる自動車もまともに動かないたぶん発電所もダメ、EMP対策を取つてるとしたら別だけど……そんなの自衛隊と政府機関のごく一部だけのはず」

沙耶の父親が直す方法を聞く。

「焼けた部品を変えたら動く車はあるかも。たまたま電磁パルスの影響が少なく壊れて無い車がある可能性も……もちろんクラッシュカバーは動くわ」

「直ぐに調べる」

部下に指示を出すと部下は走り出す。すると、

「沙耶っ」

「え、何」

「」の騒ぎの中でよく冷静に物を見た褒めてやる」

すると門の方から大きな音がする。見ると 奴ら が門に体当たりを始める。すると門が押し倒され奴らが敷地内に入り込む。

俺達はこの状況に馴れていたのかも知れない。たぶん俺は馴れてしまっていた。この無限地獄に、この狂っている世界に・・・

第1-3話 旅立つ時はハンカチを忘れずに！（後書き）

久しぶりに書くと結構キツイですなんかパソコンの方がスムーズに書ける気がする作者です

ケータイだとチマチマして面倒くさく感じました。

これからこの原作の単行本ができるまで更新が滞ると思いつので新しく何かを題材に書きたいと思うんですが、なにを書くか思案中です。
何かいいのありますかね～。

次回はアンケートを取るかもです、これからも見て下さい！

第1-4話 夜にエアコンを付けないと死んでしまう（前書き）

どもっ、作者のザンです。

今まで投稿出来ずに済みません。

謝罪や弁解は後書きにてさせていただぐので

先ずは本編をじっくりご覧ください！

第14話 夜にエアコンを付けたが…

「奴ら あつちに引きつけられてる
俺達はマジドさんの整備したバギーに乗り走り出し何とか門を抜けた。

「ビリから外へ逃げるの」

麗が言つと汎子さんが当たつ前と咄嗟に逃げた。

「あそこにあるまことよ」

そこにはバスとコンクリートブロックの隙間が目に入る。

「狭すぎるわ」

「先生ムツヨ~」

麗と先生がムリと言つてはいるがここ以外出る所が無い、だから孝が先生と運転を変わる。

「小室君、運動会の障害物競争では何位だった

汎子さんが突然質問する、すると孝の口の端が吊り上がる、それでも田の前の隙間が迫る。

「ビリから一一番田」

バギーのアクセルを目一杯上げ隙間を抜ける。

「孝、嘘言つなよお前ビリだつたじやん

「違ひ、あれは晴がズルしたせいだろ」

「ズルなんかしてねーよ、お前が勝手に俺に引っ掛けつて転んだんだろ」

「ぐつ」

俺達の喧嘩とも言える言こと合ひにみんなは少し笑い合ひ。

「んで、これからどうすの」

孝との言い争いが終わり孝に聞く。

「悪いけど麗と僕の親搜しに付き合つて貰います、麗と僕の家、東署、新床第三小学校の順で、このまま走れば二時間もかかりません、そのあとは・・・先生の友達も」

孝が近い順に探す場所を言つ、最後に先生の友達を入れたのはさつきの電話で生きている事を確認できたからだつ、その言葉を聞いた先生は嬉しそうな表情になる。

「間もなく国道だ」

国道を左に曲がるとそこには、街中から煙はたち、見える範囲の車

は確実に壊れ血が付いていた、奴らは田を開けば田の端には必ず映る、そんな光景が眼前に広がっていた。

「どうじろひてんだよ

「当然だし」

孝が咳くと沙耶がそれを知っていたかの様に声を大きくして呟つ。

「どうしたんですか高城さん」

コーダが引き攣つた笑みで聞くと沙耶は腕を組んで自信満々に言つ。

「本当に鉄砲撃つ以外取り柄がないのね、でぶちゃん、奴らは音に反応する。そしてEMP攻撃は街中から人間とその技術を作り出していった大きな音を消し去つたワケ、アタシのパパ達はそうしたながダイナマイトまで使つた」

「そしてアタシたちもバギーの音を響かせている、恐らくこの街でただ一つのHンジン音を」

沙耶の話が終わり今まで聞いてた汎子さんが口を開く。

「納得はいった・・・だが、いま問題になっているのは、この場をどう切り抜けるかだよ」

沙耶の説明は俺でも理解できた、でもどうあるのかの問題は解決していない。

「このバギー水陸両用よね、水に入ればいいのよ、奴らは水に

入れないじゃない

麗が思いついた様に言つ。

「松戸さんに聞いたんだけど、この人数じゃ浮くかどうかアヤシイ
そうだ」

孝の言葉に麗は落胆の表情になる。

「どうするつもりよ

「・・・・・引き付け・・・過ぎたか」

あれからバギーを囮に他のみんなは歩いて後で合流する手はずになつた、そして現在俺と冴子さんは土手の上まで多くの 奴ら の惹き付けに成功した、別れる時なぜか麗と沙耶に冴子さんに手を出しながら約束は守れとか色々怒られた、でも最後に2人共心配そうな目で見られた。

「東雲君、君はヤル」とが極端過ぎるよ

「すいませーん

「そろそろかな、私はいつもここよ

冴子さんの言葉を聞いてハンドルを握る力が強くなる。

「行きます

手元のアクセルを捻り坂を下りる、奴らは土手下まで転げ落ちた。

「俺より極端な気がします」

「ふふ、かもな、だが結局は同じか」

転げ落ちた 奴らはボキボキと音を立てながらまた起き上がる。

「都合よくって感じには行きませんね」

そして川にバギーを走らせ飛び込む、すると水飛沫で服が濡れる。

「冷たつ、冴子さんぶじ……で……」

振り返り冴子さんの姿を確認しようとすると、水も滴るなどやら、冴子さんの服がビショ濡れで下着が微かに見える、俺の目は釘付けになる。

「私も女だぞ……」

俺の視線に気付くと顔を赤らめ胸の辺り腕をクロスさせ隠す、俺はすぐさま前を見るが素晴らしい光景が頭から離れない。

岸に 奴らが集まるのを確認するとバギーのエンジンを切る、バ

ギーは川の流れに乗り少しずつ下流に流れる。

「これでひと段落ですね」

「これからどうあるのだ

汎子さんの顔が俺の耳元まで近寄る、その時少しドキッとしたが、その後ビックリする汎子さんの胸が俺の胸中に当たる感触が伝わったからである。

「や、やうですんね、あああの中州に止めて時間が経つのを待ちま
じゅう

若干動搖しつつもハンドルが曲げ中州に乗り上げる、濡れた上着を脱ぎ川岸を見ると奴らが土手からだんだん数を減らすのが分かる、すると後ろから可愛らしくしゃみが聞こえた、振り返ると汎子さんが着替えずにバギーに腰掛けて居た。

「す、すまない・・・身体が冷えてしまつたようだ、しかし荷物を持ち出す暇が無かつたから・・・」

寒そうに自分の体を抱きながら言つ、俺は自分の鞄から急いで先輩に服を渡す。

「とつあえず乾くまでこれ、着ててください」

「あつがとつ

俺はすぐに鞄を向け着替えるのを待つていろ。」

「 もひこじよ

そう言われ振り返ると、タンクトップ姿で髪をポニーテールにしている冴子さんがいた、その姿に一瞬見とれてしまった、それに気付いた冴子さんの仕草はまた格別・・・いけねつ。

「 ビー」か変だらうつか

自覚が無いのかキョトンとした顔で言ひつ。

「 いやつ、変じじゃ無いですけど、その、何と言ひつかへ・・・似合つてます」

あたふたしながら思い付いた答えはこれしかなかつた。

「 君も小室君も私を女として見てくれる」

「 嫌なんですか」

「 嫌いではない、私は女だよ」

その後は少しこれからの事や現状確認、脱線して楽しい談笑をした、会話が少し止むと冴子さんは時折寂しそうな面持ちで空を見て居た。

アレから服は直ぐに乾き、俺達は合流地点を田舎しまだバギーに乗

り走りだした、暫く走るとまた 奴ら が道のあちこちに居る。

「これでは中州に逃げ込む前と同じだぞ」

「そうですね・・・・・あつ、そうだ」

「そう言ってハンドルを右に曲げ突当たりを曲がると公園が見えて来る。」

「公園」

そのまま公園の中央に向かってバギーを走らせる、公園内は 奴ら がかなりの数集まっていた、そのまま中央にある噴水に入る、少量ながらも水が汎子さんに掛かる。

「君は女を濡れネズミにする趣味でもあるのか」

「たまたまですよ、それよりバックからテープを取つて下さい」

汎子さんは若干立腹気味だがテープを俺に渡した、それでアクセルを全開にしてテープで固定する、バギーは当然噴水の中をグルグル回り始める。

「なるほど・・・音で引き付けてその間に・・・」

「はい、ここから東側の出口が近いから、そこから出ましょう、なるべく銃は使いたくないんで」

「なるほど・・・承知した」

言つが早いか冴子さんは『村田刀』を抜刀して 奴ら に切りかかる、俺もバツクと銃を肩に掛けバギーに積んでいた木刀を構え近くの奴ら の頭を叩き割る、俺は田の端で刀で首と身体が切り離された者や顎から上が無い者を作り出す冴子さんの生き生きした姿が見えた・・・これぞ『水を得た魚』と言つやつだと思つた。

「凄過ぎだぜ、 冴子さん」

ポツリと咳く、 それからまたバッタバッタと切り殺して行く冴子さんその手が止まる、 視線を向けると子供の 奴ら がいた。

「どうしたんですか冴子さん」

つい声を荒げてしまふが気にな出来ない迫る 奴ら を吹き飛ばして 冴子さんの下に駆け寄り子供の 奴ら を吹き飛ばす。

「へへへ、 いらっしゃです」

冴子さんの手を引き公園を出る、 だが 奴ら がダンダン増え始める、 一々倒していく無いので木刀で受け流したり来る前に突いて倒したりして進む、 途中冴子さんを見るが意氣消沈と言つた感じで 戦える状態じゃない、 そんな事を考えながら進むと鳥居が目に入る。

「おひ、 ローソクだ、 これで暗闇で過さないで済みそつだ

俺達は一畠神社の境内の中夜を廻り歩き事にした、涼子さんは隕で
体育座りしている。

「涼子さん、そんな感じで居たら身体冷えますよ、ひっそり座つて
ください」

バックの中にあつた寝袋を敷くと涼子さんがひっこみ寄つて来ると
口を開く。

「…………何もたずねないのだな

「貴方も俺も人です、それなりの理由があるはずですよ…………言つ
まで待つ甲斐性は持つてるつもりですけど」

「ふふふ、そうだな、君になんの意味も無い話だが、聞いて貰える
だろつか」

「話すなんなら聞きますよ」

みると涼子さんは一呼吸置くとおもむりに話始めめる。

第14話 夜にエアコンを付けるヒミツ…（後書き）

どうでしたか？

ほぼ一ヶ月も更新が滞つてすみません！

え～弁解と言つぽこ訳と相方との経緯です

夏バテらしきモノでやる氣を削がれ

炎天下の中ほぼ毎日部活に狩り出されエアを限界寸前まで減らされ
何度も死にかけた事や～

夏休みが終わり直ぐにテスト

その後も夏休みの休みが恋しくなりパソコンに向き合ひえず仕舞い

こんなダメ作者の救世主が推参！

今の食べられる野草（以下食べ草）です。

前から興味があつたらしく、「組んでみる？」と聞くと

案外早めに〇〇を貰い今に至ります。

これからは食べ草も作品を書く予定です

ですからこれからもよろしくお願ひします。

それからこの小説は一時休止させていただきたいと思います

ですがいつか・・・と書つか原作が進むまでの「辛抱をお願いいた
します。

「どうせやめたまではやめられない、もうやめさせたまたやめよう」
と云ふ。

えー今回アンケートです、現在凍結中の小説に代わる新たな小説
を書こうと思つたんで

すが・・・・・

作者によると、の足りない頭では何を書けばいいやらと迷っていた
時・・・・・「読者に聞い

ちゃ「えばよくな?」と迷って至つたのです。

では誰も俺にネタと雰囲気とほんの少しの優しさを～～～～～

ですがこの決断には作者の今後にも関わる重要な事・・・ですが皆さまを信じ若輩者のザ

ンですが読者の皆様の一存に掛けます！――！

「コードギアス・・・悲しい筈がなぜか笑いが・・・原作がどこまで原型を留めるか見物だな

一〇〇

魔法先生ネギま！・・・ネギの従者としてネギパーティーに参加だぜ・・・なんか牛歩更新確定モノの話がしつかり出来ない不完全

三〇三

真・恋姫無双・・・恋姫達とイチャラブに走るぜ・・・プレイしたこと皆無、でもかなり好きな作品もある

四〇四

真剣で私に恋しなさい・・・最強の名を欲しいままに手に入れる・・・これもプレイ皆無、現在資料をかき集め中～

五つ目

名前が思いつかん・・・にゃんこい、エデンの檻、working
荒川アンダー、マケン姫、ディーふらぐ、ながされて藍蘭島、セキ
レイ、トリアージX、紅 kurenai、とある魔術・科学
etc・・・かけるか不安だが頑張りたい。

六つ目

オリジナル・・・ザンと食べ草で共同制作・・・企画段階まで進
行中♪

七つ目

読者の希望・・・読者の皆様が書いて欲しい一次小説を投稿・・・
これで君も真のオタクに近付けるかも

八つ目

短編集・・・読者の皆様が好きな作品の短編を書いて投稿・・・
君も将来優秀で立派な小説家候補になれるかも

九つ目

禁術・・・もう作品投稿禁止、名付けて「凍結捕縛封印」・・・
作者 자체가凍結してしまえと作者をユーザーから消去・・・。
【二】
れは絶対しません

期限は1週間にしますが伸ばしたり短くしたりするかもしれません
そこ辺りはご了承を

お願い致します。

では約1週間後に”活動報告”にてお知らせいたします。

これからもじひこきにー！

再見ー！

マジ恋 お試し〜（前書き）

暇なので書いてみた。

大和視点進行（悪魔で今回は）

マジ恋 お試し

「・・・・・」

めちゃくちゃ清々しい朝、俺こと直江やおえ 大和は起床。

「・・・・・」

なんだ幻覚か？

起きると腹に重みを感じ布団をめぐると・・・

「・・・ZZZZ・・・」

榊原さかきひら 小雪こゆき。2-F所属で俺と同じ風間ファミリーの一員である彼女の寝顔が目の前にあつた・・・

「大和、おは・・・・」

そしてこのタイミングでドアが開き少女が入つて来る、ドアを半開けでコチラを変な目で見る彼女は小雪改めユキと同じく2-F所属で風間ファミリーの椎名しげな みやこ。幼少期に家庭の事情で痩せ細った彼女があることがきっかけで助けたことでファミリーのとある一員に惚れ現在はファミリーの一員である。

「大和がオオカミになっちゃった・・・」

「待て京、どう見ても襲われてる側だろ」

「そんなこと置いといて早く起きて、朝ご飯できる」

「置くなよ・・・まあいい起きるか、おいユキ起きろ」

京はそう言つと部屋を後にすると今だに腹の上で寝ているユキを強めに揺すり起こす

「・・・女の子は優しくしなきゃダメなんだぞ・・・ZZZZ・」

「寝言で適切なこと言つなー。」

その後ユキを起こし制服に着替えようとすると。今度はロボが入つて来る。

「やあ、お目覚めかい大和」

「クッキーまた人の部屋に勝手に入るな・・・」

「あーあ、布団がグチャグチャだよ」

「朝からロボが小言を言つな」

「なんでそんな事言つんだよ、ボクはオマエの」と思つて言つてゐるじゃないか！」

激怒する」のロボはクッキー、世界の九鬼財閥が開発した最先端技術の結晶……らしい……そして

「あまり舐めたことを言つていると切り刻むぞ」

変形する・・・基本卵型の丸っこい形^{なり}が急にスマートになる

「こりこり変形するな、つたく無駄にハイテクめ」

そのあと洗顔し着替えて、ヤドカリのヤドンとカリンに挨拶をして朝^一はんを食べに食堂に向かうと「の島津寮を嘗む島津麗子さん」と出会う。

「おひ、大和ちゃんおはよ」

「おはようござります、相変わらず名前^一おつ美しいですね」

そう言つてお世辞と分かりつつも氣分を良くした麗子さんは朝食にタマゴを追加してくれた。

「あひ、お、おはよ・・・『れこますー』

いきなり氣合いの入った挨拶をしてくるこの娘は、1-C所属の薬^{やく}み由紀江^{ゆきえ}そしてなぜか帯刀している。

そしてみんなで食事をはじめる、2人を除いて。

「キャップと龍也、またいないね」

「マイスターなら、土曜の夜から外出中だよ」

「あの2人、今度はどこ行つたんだよ・・・」

キャップこと風間 翔一。かさま しょういち 2・F所属の風間ファミリーのリーダーで放浪癖があるがいつものことなので放置。

「チツ、起きんのが遅えんだよテメエは」

ここで舌打ちをした彼は源 忠勝。みなもと ただかつ 通称ゲンさん、同じく2・Fで新ジャンルの健康的な不良を開拓した人、そして見た目に反して優しくツインデレだ

みんなでわいわいとまでは行かないが会話をしながら食事を済ませる、ゲンさんは登校時間になると1人で先に行つてしまつた。島津寮の隣の島津家から麗子さんに急かされ1人の学生が出て来る。

「やあ名前負け」

「いきなりケンカ売つてんのかテメエー」

島津 岳人。しまづ がくと 2・F所属で麗子さんの息子、筋トレが趣味で自分の

筋肉が自慢、女の子にガツつく悪い癖があり口の権化だ・・・

「冗談だ。今日もかつここいぞ」

「よせやいいきなりホントのこと？」

バカで扱いやすいほど単純。しかしいつもまして扱いやすい。

「どうだ京。今日の俺様いつもよりイケてるだろ」

「具体的にどうが？」

「ムダマシチヨー」

「ムダじゃねー！・・・髪型とか、ビシッて決まってメスホイホイだろ」

「変化なしだね」

「はんっ、俺様はお前が心配だぜ京ちゃんよお」

「なにその不快な上から田線」

「ふかいふかい」

「ユキータちやちやち入れんな・・・それより、男の大和でさえ俺様のもてオーラ感じてんのに」

「なに言つてんのウソに決まつてんじゃん、バカかよ」

「ガクトの頭が心配だ。将来大丈夫かな

「心配だ」

「なんだこの幼馴染たち容赦ねえ―――！」

4人で多馬川沿いを歩いて登校。春の口差しが心地いい。

「やー」

今日発売の週刊ジャソップを読みながら歩いて来る男が来る。

「おはよっ師岡 頂也。^{めいおか たかや} 2・F 所属趣味マンガやネット」

この辺を髪で隠し如何にも運動が出来無いそつ男。師岡頂也、通称モロが合流する。

「えらく説明的だねえ」

「モロは影薄いから存在確認しないと忘れそうで」

「朝一で酷い事言わないでよー、しかも京に影薄いとか言われたくない！」

「影ウス～モロ～」

「ユキもやめてよー」

そしてガクトとエッチな漫画を読み始める。そんなこんなで川沿いを進むと前方に人だかりが出来ている。

「なの騒ぎだ？」

見るからに不良な男集団12、3人が屋台と男女2人をグルリと囲んでいる。しかも男達はバットや鉄パイプで武装している。

周りの川神学園生徒は誰も助けようとせず、むしろワクワクした目でみている。

「これは朝から大ピンチ」

「ピンチピンチ」

「楽しそうだねコキ、でも早く止めないと大変な事になっちゃうよ」

「そんな事言つてゐる間に始まつた」

その後は地獄だー（不良たちにとつて）、2人の男女により関節を外されテトリスの様に組み上げられて行き最後に姉さんが回し蹴りを叩き込みテトリス？を崩す。すでに一種のホラーである。

その崩れた関節が外れた不良が転がる中2人はそこに居た・・・・鬼神と武神・・・その圧倒的な強さはまさに鬼神と武神に相応しい。この女性は川神かわかみ百代もよよ。武術の世界に置いて知らないモノは居ない川神 鉄心の孫娘でとてもなく強い、風間フアミリーの中で唯一年上だ。そして男性の方は、2-F所属の焰ほむか龍也たつや。姉さんとチー

ムを組む最強の男、自分の屋台を持ち放課後や昼休みに偶に自営業を営む奴でエレガンテ・クアットの一人、京の意中の相手。

「あーーん、今日もモモ先輩もタツちゃんも超かっこいいー。」

「」の無敵さがたまらない系ーー！」

女子はキャーキャー騒いでいた。

「さすがモモ先輩、まさに霸王だぜーー！」

「タツの奴もカッコ良過ぎだぜーー！」

「あの2人は最強のコンビだぜーー！」

・・・男子もキャーキャー騒いでた。

「相変わらずの滅茶苦茶さだ」

「1人1発ずつ蹴り入れてたね」

「そ、そうだな。スゲー蹴りだつた」

「ウソ、実はパンチ。龍也は両方」

「京てめえー」

「・・・ガクトでさえ見えて無かつたんだね、それにしても京はよく見えたね」

「『』使いは田がいいと相場が決まっているのです。ちなみに、モモ先輩は一番不快な笑い方をした丸顔の男には顔面への強打の他に、腹部に3発いれてた」

「8発だー京、まだまだ甘いなー」

そう言ひて近付いて来る姉さんと屋台を引っ張つて来る龍也。

「こやつ俺は16発叩きこんだ」

「じゅ、16発……凄過ぎるぜ龍也。こんな奴が幼馴染なんて、俺様自信無くしちゃうだぜ」

「そんなのドブにしてなよ、ムリだから」

「ムリムリ~」

「ふふふ、カワイイなさつき1年、見たか顔を真っ赤にして」

満足そうな顔で自慢する。先程の女子の集団でいい収穫があつたらしい。

「見たかじゃねえよ、モモ先輩!」

「なん?」

「こつも可愛い子もつて行きすぎるー、俺にも回してくれよ

「嫌だね、欲しけりや自分で調達すればいいだろ。まあ可愛ければ略奪するがな、ふふふ」

不敵な笑みを浮かべる姉さんに、涙を流すガクト。

「美人の女好きって超もつたいねえよ・・・」

「おいおい私は根っからの女好きってわけじゃないんだぞガクト。ただ周りの男が龍也以外魅力無くちゃ。女の子にもちょっかい出さ」

「その割に俺へのちょっかい出した回数少なくね?」

「なんだ構つて欲しいのか?」

姉さんの目が光、龍也の胸に顔を押し当てる。

「・・・これはー・・・甘えてると言ひつのでは?」

「いいんだこれで、ふふふ」

姉さんは気持ち良さそうに顔を押し当てる。

「ふふ、タツヤ。好き」

「京、唐突過ぎて意味が不明だ」

「えへへー、タツヤー」

京、ユキも龍也に抱き付き一種のカオスが出来上がる。

「そろそろ行かないと遅刻になるぞ」

「くそーなんでだ——！」

「はは、こつもと変わんないね」

「モモ先輩早くしないと遅刻だぞ」

そして俺達は登校して行くと多馬大橋に到着。渡った反対側に行けば川神学園がある。この橋、別名変態の橋と言われている。

「みんな——おはよ——！」

元気な挨拶と共に現れたのは川神一子。かずこ趣味は体を鍛えること、好きな食べ物は肉と言う現代女子としては異形の女子。

「おはよう！」

「や

「ワンドおはよー！」

「モモワンド

「おはようワンド

「川沿いに大勢伸びてたけど、タツとお姉様？」

「どうやら川沿いの惨状を見て来たりじ。」

「ああ、つまらない相手だつたな」

「もつと骨の位置をすりすべきだつたな」

「お前は鬼か！」

「うへんそうじやね？」

「否定しなよ！」

「あはは、やつぱり凄いや」

「やう言えばワン子今日はタイヤ二つか？」

「うん、その分川沿いに東京都まで行つてきたよ」

「昨日は静岡まで行つたのに、元氣だね・・・」

「アタシはタツやお姉様に比べるとまだまだだから」

「大丈夫だ努力は人を裏切らない、日々精進これ強者の基本」

龍也はワン子の頭を撫でながら笑顔で言つ。後ろでは姉さんがなぜか真面目な顔で2人を見ている。

「こえ へへへ」

ワン子が既に骨抜き状態だ。

「ひゅうひゅー」

「待てゴキー、蝶蝶を追いかけて道路に出るなー。」

ゴキは相変わらず自由で蝶蝶を追いかけて道路に立つとするのをワンドの頭を撫でていた龍也が即座に襟を捕まえ持ち上げる。

「ハーフタツのケチー」

「あぶねー事すんなつ」

ふうーとため息をつく龍也。そのまま俺達とワンドは普通に歩いて登校する・・・タイヤを引きずつながら。

「歩く時へりこトレーニングよそい」

「アタシはいかなる時でも鍛える事を忘れないのか」

「タイヤを引つ張る娘と歩く二つ子が恥ずかしい」

「この内気、だからアンタはモロなのよ」

「歸国は生まれついての前なんだよー、否定しないでよー。」

「内氣で陰氣なモロー」

「ゴキまでやめてよー。」

「ハーフして鍛えていれば、強くなるだけでなく、体もお姉様見たい

「バーンとなるわけよー。」

無い胸を突き出しじや顔をする。

「スタイルでも並ぼうと?」

「うん、何をおいても、お姉様はアタシの目標。とつあえずお皿に牛乳飲むんだ!」

「それでも無理は無理だろ」

そう言って姉さんを見る。しなやかに伸びた脚、無駄なく引き締まつた体に激しく自己主張をする胸とキュッと括れたウエスト、流石学園最高の美女。同時に学園最強で無ければ言ひ寄る男も星の数居るんだろうな。

「やつぱつワソニには無理だ」

「なんですかー!。いつか巨乳になつて”おこおいお前の体は果物やか”とか言わせてやるわー!」

「あはははははー。」

「ナイスギャグ、合格」

「おこ京に受けたぞ、はははは

「バカ共笑うなー!、真剣なのよー。」

「いやつ、今のは笑えるな。ははははー。」

「なつ何よー・・・」

笑い続ける俺達にワニ子はだんだんと声に霸気が無くなり泣きかは
いつてくる。

「よーしよし、初奴め！」

初奴め

龍也とユキが慰めに入り頭を撫でると即座に復活。

「余りワン子をいじめるな、シメルぞ」

一 爰けて立つ、ガケトガ

「なんで俺様に回して来るんだよ？」

龍也が力ケト素早く近付く

「龍パンチ！」

「アーティスト」

妹キッケ!

姫ハンチ!

「いひてええええ！」

龍也のアッパー、ユキのハイキック、ワン子のロー・キック、姉さんの中段突きの流れる様なコンボが見事に繋がりガクトは倒れ込む。

「モテりるじゃんガクト」

・・・そんな騒がしい朝の平凡な登校風景。

マジ恋 も試して（後書き）

やつだらう。

ネギモ 試作（前書き）

書こひやつた・・・

なんとかなるかな？

まだ冬の寒さが残る季節、緋咲 悠は学校へ登校していた。

「ふあー、寝む」

まだ眠気が抜けずフランフランと道路中央を歩く。

「……………ンオッ」

悠は寝ながら歩く妙技をするが路面電車のレールに躊躇^{つまづ}しきける。

「……………痛い…………」

こんなマイペースを崩さないまま自分が授業を受けるべく、"女子"中等部に向かう。

・・・・さてこれは決して彼が望んだ事ではなく、学園長が中等部の共学化の為に彼が長い審議と言つかくじ引きで決まった・・・・・と言つ噂があるがいまだ謎である。

そして彼はこの登校を約一年半ちょっと近く続けていたためもうその話題も沈静化しつつあった、そんなこんなで教室に到着するなり机に突き伏す。

「・・・・・ N N N N N N N N • • • • •

「・・・・・ つ・・・・・ ゆ・・・・・ ゆ・・う・・・・・ 悠一」

誰かの声が聞こえ目を覚ます悠一そこには素敵なステキナ・・・
拳があった。

「グオツ」

拳骨、古来より人が何かしらの理由があり頭や他の部位にぶつける
堅く握り締めた手を現す、その威力は扱う者の技術や力により変化
するが・・・・ 痛い

「全く人が何度も呼んでんのに」

いまだ痛い頭を押さえ目線をずらすと立腹姿のアスナが居た、神か
楽坂明日菜。小1の頃からの付き合いの言わば幼馴染その2だ。

「・・・・・ 痛いよ、アーチャン」

「何が痛いよ、ってかアーチャン言つな

「それで、どうしたのアスナ」

ようやく痛みが治まり眠気が拳骨で飛んだ。

「アンタなんで人の席で寝てんのよ」

「・・・あれ」

机を確認すると確かに自分のではなかつた。

「・・・本能かな」

またもやアスナの拳骨が炸裂するがそれを難なく躱す。

「ふつまだま・・・グオツ」

一発目が頭を捉える。

「まだまだね」

勝ち誇った笑みを浮べるアスナ。

そんな朝の一つの光景があり今日は新任の先生が来ると報道部の朝倉和美が言つていたので2・Aはいつもより少し騒がしかつた。ある者は歓迎のトラップを仕掛けたり、肉まんの押し売りだつたり、カメラを磨きながらネタネタ言つてる奴がいる、そんな平和な朝。

「眞さん、そろそろ席に付いてください」

委員長こと雪広 あやか。委員長の称号を欲しいままにする品行方正、才色兼備で実家がお金持ちの幼稚園からの付き合いでの幼馴染その1、その声でみんなが席に付き先生が来るのを待つ、コンコンとノックが聞こえ教室の前の扉が開く。

「失礼しま・・・」

見ると子供がタキシードを着て扉に手を掛けると、上から黒板消し（チョークの粉特盛り）が子供の頭に当たり粉が飛び散る、だが俺の目には黒板消しが一瞬だけ止まつた気がしたがまだ寝ぼけていると決めつけてまた子供を見るとみんなが子供にビックリしている。

「えーー、子供」

「君、大丈夫」

「「ゴメン、てっきり新任の先生かと思って」

子供と分かるや否や気に掛け始める、するとしづな先生が手を叩き騒ぎを止める。

「いいえ、その子があなた達の新しい先生よ、で、自己紹介して貢おつかしら、ネギ君」

「は、はい」

しづな先生が促すと子供先生は教卓まで行くと自己紹介を始める。

「ええと、あ・あの・・・ボク・・・・ボク・・・・」

これだけの人数に戸惑つたのか少しどもる。

「今日からこの学校でま・・・英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです、3学期の間だけですけどよろしくお願

いします

「 「 「 「 「 ． ． ． ． 」 「 「 「

少しの静寂が訪れるが。

「 「 「 「 キヤアアアツア」 「 「 「

「 「 「 「 カワイイ～～」 「 「 「

やつぱりみんな思つた通りの反応を数人のクラスメートがネギ先生に迫り質問攻めにする、そのまま抱きついたり頬ずりしたりしづな先生の注意も耳に入らずかなり過激に歓迎をしていた、するとアスナがネギ先生を掴み上げ教卓に乗せる。

「ねえ、アンタさつき黒板消しに何かしなかった・・・何かおかしくない、アンタ」

アスナがネギ先生に質問をすると慌て始める、ネギ先生にさらに食つて掛かるアスナ、そこに机を叩くあやかの姿があった。

「畠さん席に戻つて、先生がお困りになつてゐるでしょ？」

さすが委員長の称号を持つだけある、あの騒ぎを一瞬で解決してしまつたのだから。

「アスナさんもその手を放したらビリ・・・もつとも、あなたのみたいな凶暴なおサルさんには、そのポーズがお似合いでしょうけど」

そこでアスナを逆撫でする事を言わなければ完璧なのに。

「なんですか、委員長にいい子ぶつてんのよ」

「あら・・・・いい子なんだからいい子に見えてしまつのは当然でしょ」

委員長に恐ろしい睨みをきかせるアスナを嘲笑つかのよつて言ひ返す。

「何がいい子よ、このショタコン」

挑発するように禁句を口にするアスナに委員長が掴みかかり喧嘩が勃発する、それを周りは煽る、ネギ先生は必死に止めようとするが取り合つて貰えずあたふたする。

はあ～またか、懲りねーなーしうがねー止めるか。

「はいはーい、そこまでー。アスナ、あやか2人ともストップねー」

取つ組み合いをする2人を引き剥がし襟元をもつて持ち上げる、こんな感じで仲裁に入るのは数えるのも面倒なくらいある、この仲裁役は俺の定位位置になつていた。

「ちょっと悠、放しなさいよ」

「悠さん放してください、今日こそアスナさんと決着を・・・」

ジタバタと暴れるアスナとあやか。

「はいはい、決着はまた今度なー。今日は新任のネギ先生の授業を受けようなー」

そのまま騒ぎは收まりネギ先生の初授業が始まった、その授業中にアスナがネギ先生に悪戯？をしてなぜかあやかと喧嘩になつたりしたがなんとか収集し初授業は終了した。

「なんで俺まで・・・」

現在俺とアスナでネギ先生の歓迎会の買い出しの帰り道。

「あそこで左を引いていれば～」

俺は激しく後悔中だった・・・。

「こつまで言つてんのよ

呆れた様に声を掛けるアスナを尻目に頃垂れる。

「それにしても今日のアスナ変じやなかつたか

「別に普通よ、ただあのガキを家に泊めるのが不満よ」

「へえ～ネギ先生、アスナ達の部屋に泊まるんだな・・・いじめんなよ・・・」

「いじめて無いわよ、ただ気に食わないのよ」

そんな話をしながら校舎に向かつ。すると視界にネギ先生が所持し

ていた杖を現在落下中の富崎みやざき のどかに向ける、すると富崎の身体が空中で一時停止する、その隙を逃すまいとネギ先生は走り出し富崎をキャッチする。

「…………」

その光景を目めの当たりにして絶句した、そのまま凝視しているとネギ先生がこつちに気付き驚いている。

「あ・・・アンタ・・・・」

「…………」

「あ・・・いや、あの・・・その・・・」

時間が止まった様にその場にいる3人は凍りついた、するとアスナが走り出しぱギ先生と杖を抱え近くの林に連れ込む、残された俺はのどかに近付くと目を覚ます。

「富崎大丈夫か」

「う・・・ひ、緋咲君・・・」

「ああ、ケガとかねえーか」

「あつ、は・・・い・・・大丈夫・・・です・・・あ、ありがとう・・・」

富崎は顔を赤くして起き上がる。

「そつかケガがなくて何よりだじゃあ俺行くから、そつだ助けたの
ネギ先生だから、じゃ」

おれはアスナが向かつた方に走り出す、しばらく行くと声が聞こえ
そこを目指す。

「おい、アスナ…………へ……」

そこにはブレザーに裸の奇抜なカツコのアスナが居た。

「あ…………ひつ…………いつ…………いやあ~~~~~」

「す、すまん……」

「す、すいません……」

あれからアスナが制服に着替えて校舎に向かう3人。

「記憶を消そうとしてパンツ消してしまいました……」

「記憶の方がよかつたわよ~~~~~、魔法使いなら今すぐ時間戻しな
さいよ~~~~~」

「俺まで被害にあわせるなよ、不可抗力で死ぬわー」

俺はあの後アスナにボコボコにされて死にかけた。

「見たアンタが悪いのよ」

理不尽だ凄く理不尽なことを言われた、だがこゝで言つとまたボロられる。

「うひーっ」

そんな事を考へていると、アスナがネギ先生を掴み上げる。

「…………で、何でそのちびっ子魔法使いがこんな所まで来て……
・しかも先生なんてやることになるわけ……」

「俺も気になるな

「そ、それは……修行のためです、『立派な魔法使い（マギス
テル・マギ）』になるための……」

「なんだそれ

「……は……」

俺とアスナは理解出来ない顔をする、するとネギ先生が説明を始め
る。

「え、えへへへと、立派な魔法使いの仕事は世のため人のために陰
ながらその力を使つ。魔法界でも最も尊敬される立派な仕事の一
です」

「ＺＧＯとかそんな感じか

「今はその仮免期間のよつなもので」

「ふう～～ん・・・それで魔法が人にバレたらビーンの」

涙目のネギ先生、なぜかこっちが悪い事をしている気になる俺。

「か・・か、仮免没収の上、連れ戻されちゃいます～～、ひどいときはオゴジヨにされちゃて・・だ・・だだ、だからみんなには秘密に～～」

あいつとかいつて錯乱状態のネギ先生を尻目にアスナは涙目ながら言ひ。

「といひことは私の」との責任もけやんとひとつてくれるんでしょう
ね」

「ホントに引き受け大丈夫かネギ先生」

あれからネギ先生はアスナの要求をのみ責任をとる代わりに秘密にする事が決定した、そして教室に向かつ途中の廊下である、アスナは教室に先に戻った。

「はい、元々僕が悪いんですけど当然です・・・それで・・・あ
の・・・」

「心配するな俺は人の不幸を楽しむ趣味はない」

ネギ先生の頭をポンポン叩く。

「は、はいありがとうございます」

嬉しそうに笑顔を向けるネギ先生。

「緋咲さんはなにか願いとかないんですか」

「ん、俺は～、う～ん～、特に無いな、あるならみんなが元気で
ある事かな～」

「緋咲さんって優しいんですね」

「そ～か～な～・～・いやそ～かも、人の笑顔とか安心した顔見てるの
以外に好きなんだ」

「僕も人の笑顔は好きです」

「それとネギ先生、俺の事苗字じゃなくて名前で呼んでよ」

「えつ、でも年上の人には敬語を使うのが日本の礼儀って」

「そんなに礼儀礼儀つて氣張らなくていいよ、心得として受け取る
のがいいと思うよ」

「・・・はい、悠さん」

そのままじばり歩くと教室に着き扉を開けるとクラッカーが鳴り

響く。

— . . . ^ . . —

ネギ先生は驚いて変な声が出る。

「これはネギ先生の歓迎会だよ」

その後はネギを準備された机の真ん中に座らせ歓迎が始まる、飲み物や食べ物を勧めたり質問したりとそれに慌てながらも対応するネギ。

「めぐめぐめぐめぐ」

俺は一心不乱に食べ物を口に運び胃に入れる。

悠くんは相変わらず花より団子やなー

そんな俺に話しかけるアスナとルームメイトの近衛
に実家があり学園長の孫娘、品行方正で料理が得意。
このえ
木乃香。京都

「んぐんぐ・・・ふはあ、どうしたんだ」

「いやなあ、一人で食べてるから話でもしよおもてな」

「そうか、木乃香はネギに質もん……」

「ゴウ一 勝負アル」

第一声が勝負一のバトルジアンキーとも言える発言をする古菲。^{くふえい} 中国武術研究会の部長で前回のウルティマホラの優勝者で我がクラスのバカレンジャーの一角。

「今木乃香と話してただろ、ちょっと待つてろ」「

「むつそれはすまんかったアル」

「別にええよ、でも勝負つてなんなん」

わつきのクーの勝負発言に疑問を抱いた木乃香が質問をする。

「ああ、2年の初めのにクーの中国武術研究会で一回見学に行つたら田をつけられたんだ」

「へーそんなことあつたんやね」

「それだけでは無いで」「さる

「急に会話に混ざるな楓」

「いやーゴウが余りにも楽しそうだったのでつい会話に混ざりてしまつたで」「さる」

この「さる」が語尾に付く長瀬楓。^{ながせ かえで} さんは部所属のほほーんとしたゆるい性格、自称忍び?でクーと同じくバカレンジャーの一人。

「ついで話題やるな

「それよつそれだけやなこいつビックリ事なん

「つい、描者せ他の部活にひまへみひへ顔を出しては色々と洋服を
れでこるでいる」

「でもウチの部活には来てへんねー

「別に行かないわけじゃない、うちの学園の部活が多いだけだ。や
れと帰つても暇なんだよだ、けど部活に入る気になれないからちよ
くじょく顔だして暇つぶしがてら一日体験見たいなのがつてんだよ
そう言うと木乃香はそつなんやーと皿づ、そしてまた置いてある料
理を食い始める。

「ユウはネギ坊主の歓迎に参加しないアルか

「俺は・・あべ・・来る時・・んべ・・いろいろ質問・・もべ・
したからな・・・・・・あぐまぐ

「いやべる時へりこ手止めるアルよ」

「むべ・・ムリだ・・やうそろ・・終わるからな

その後も終わるまで俺は食いながら話しながら過いした。

歓迎会の帰り道。

「・・・ZZZZZ・・・」

「ちよ、『ラ寢るな

アスナに頭を軽く叩かれ（はた）軽く目を覚ます。

「寝ながら歩いたらあぶないえー

「寝ながら歩けるんですか

「・・眠い・・ムリ・・・

木乃香は心配して俺に話しかける、ネギは俺の特殊スキルに驚いて
いる。

「ホントに昔から危なっかしいんだから、ほり手握って

「・・ん・・・ありがと・・・

アスナが若干顔を赤らめながら俺に手を差し伸べる、俺はその手を
掴みアスナに引っ張られながら歩く。

「ほんま仲ええなー羨ましいわー

「やめてよ木乃香」こいつとはただの腐れ縁よ

そんな感じで女子寮に到着すると俺はそのまま管理人用の部屋に連れて行かれアスナに布団を敷いて貰つたり洗濯物を洗濯機に入れて貰つたりと世話を焼いて貰ついる中、完全に睡眠に入った。

ネギモ 試作（後書き）

駄文だー・・・

悪魔で試作と割り切つて下さい。

誠に勝手ながらこの小説、

『俺よ、死んでも心をしつかりもて・・・・ムリっぽいけど』

この作品を作者自身で読みなおしたといふ・・・・

表現や関連性が悪かつたり文章力に、

はつ、と自分でさえた鼻で笑う所が、所々あつたので、

更新を打ち切り、新装版として新たに書きたいと思います。

作者の都合で勝手なことをしてしまって、

誠に申し訳ございません！

新装版の更新につきましては今の所未定です、

いいで明かしますが、自分学生なモノで・・・

部活との時期で大きなイベントの修学旅行で少しの間、

PCに向かえないの…すいません…

ですがなるべく早く更新したいと思います。

若しかしたら週末に出来るかも知れません…

これからもザンと野草を宜しくお願いいたします！

では後ほどー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9296m/>

俺よ、死んでも心をしっかりもて・・・ムリばいけど

2011年1月12日19時37分発行